

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



第七十五卷 第六号 日本幼稚園協会

6

倉橋惣三先生の代表作が フレーベル新書に登場です!!

新刊

フレーベル新書 10
幼稚園真諦
500円

単なる理論的な組立や基礎づけだけに終わらせないで、実際に即した保育法や保育案についてやさしく述べている新任保育者必読の書。

フレーベル新書 11
子供讃歌
600円

わが国の幼児教育の基礎を築いた著者の自伝風読み物。保育に献身する先輩たちとの出会い、フレーベル遺跡巡礼のことなど興味あふれる文章で満ちている書。

フレーベル新書 12
育ての心(上)
550円

「自ら育つものを育てようとする心。それが育ての心である。」と著者は語る。「育ての心」は相手を育てるばかりではなく、それによって自分も育てられてゆく心である。

フレーベル新書 13
育ての心(下)
650円

我が子を育てて自ら育つ親、子どもたちを育てて自らの心も育つ保育者。育ての心は子どものためばかりではなく、親と教育者とを育てる心である。

既 刊

1. リナはどうやって文字を覚えたか 380円
2. 保育者への一つの指針 500円
3. 対談 しごとと生きがい 470円
4. 楽しい遊び〈室内園庭編〉 500円
5. 楽しい遊び〈伝承遊戯編〉 480円
6. 楽しい遊び〈園外編〉 500円
7. 自然物のおもちゃ 380円
8. 私の幼児教育論 600円
9. 母親面談 550円

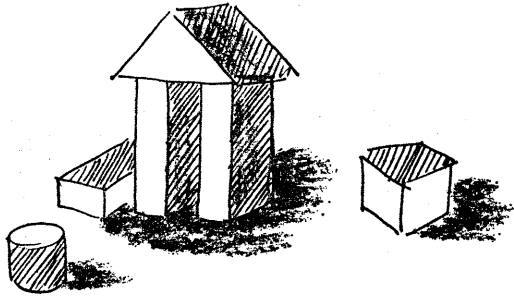
☆もよりの代理店・支社・支店・営業所へお申し込みください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十五卷 第六号





20.

幼児の教育 目次

——第七十五卷 六月号——

表紙 永瀬善郎

(「もの想う天使」)

カット 中島英子

幼稚園の規模その他……………多田鉄雄(4)

雨のさまざま——平安文学作品から……………関根慶子(6)

雨……………森下博三(8)

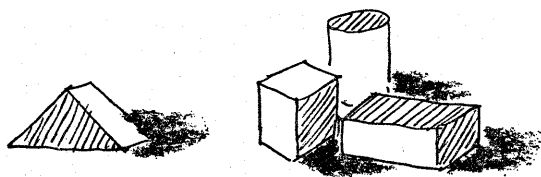
雨……………及川栄子(10)

雨……………徳丸吉彦(12)

保育の中の小さなこと大切なこと③……………守永英子(14)

光の中に大人たちもいる

——独断的発達についての覚書……………大野松雄(16)



学校訪問旅行記(その二)

——アメリカの多様な施設を中心に——……………村田修子(25)

★講演

三つ子の魂(下)……………外山滋比古(34)

教科研究における保育の授業の展開(三)……………磯部景子(44)

乳児期の母子関係

——Attachmentの形成を中心として——(後編)……………岡野雅子(49)

MIT・ナースリー・スクール……………原口純子(58)

幼稚園の規模その他

多田鉄雄

就学前の年齢の幼児に対しては、つねに教育の面と保護の面とを同時に考えねばならぬとするのが、私の持論であり、それゆえ思弁的には幼・保一元化の理念が、制度的には幼・保の関連の仕方の問題がもっと切実に取り上げられるべきであり、その点で昨年十一月の行政管理庁の幼・保に関する指摘はきわめて適切であったといえる。

それはそれとして、マスコミ・情報化社会と呼ばれる現在においては幼児を取り巻く社会条件、環境がその身心の発達を従来とは異なったものにしており——例えば発達の加速度的現象とか——、このような幼児の生活には、それが都会であれ寒村であれ、自然的な遊びと並んで、少なくとも若干の計画的教育の配慮——就学前教育——を必要とするに至っていると思われる。わが国の就園率の上昇は一面においてこのことを裏書きしたものと見られる。

幼稚園はその発祥地のドイツにおいては今も所管は社会

福祉省であるが、十数年以前から教育重視の方針が打ち出され、一九七一年のドイツ連邦学校制度審議会は「幼稚園は教育制度の一部門、すなわちその基礎領域をなすもので、満三歳以上の就学前幼児に対し、家庭を補う教育と陶冶を与え、施設である」とした。かくしてヘッセン州は一九七五年その社会福祉省が「幼稚園と就学前教育」なる文書を一二万部印刷して該当する両親に配布し、その中で次のように説明している。「就学前教育は早期に開始される学校教育を意味しない。幼稚園での学習とは、読み書き算そのものではなく、学校教育的な学習に対する一般的な条件を準備すること、例えば観察とか、比較とか、計測とか、要するに認識の基本的な方法の習得であり、さらに言葉の理解とか、使い方とか、質問する能力とか勇氣とか、問題を解決しようとする態度とか、要するにのちの学校教育の学習を可能かつ効果的たらしめる基本的能力を育ててゆくことである」しかもか

かる早期の学習がすべての幼児にとつて意義深いものであるから「すべての幼児を幼稚園へ」と言う要求が生まれている」と。

遊びの中で、あるいは遊びと並んで、かかる意味の学習が幼児にとつて必要であるならば、すべての幼児に幼稚園生活の機会が保障されるようになるべきであろう。イギリスの幼児学校、フランスの母親学校などは制度的には現実にそれを保障出来る仕組みになっている。

もともと幼稚園の基本的条件の一つは通園が可能であるということである。これを小学校の学区と関連させて具体例で見ると、幼児の年齢からして小学校の通学圏より通園圏が小さいことが望ましいであろうから、一学区に二幼稚園として見て、標準的な一二学級小学校の学区に二つの幼稚園をおくとして、一幼稚園の同年齢児は五〇人以下であり、三、四、五歳児全てが就園しても一五〇人以下の幼稚園二つになる。さてわが国の実際を見れば、最近、小学校入学児童の六一・九%が幼稚園経由、二五%以上が幼稚園に準ずる保育を行なうはずの保育所経由である。この数字は就学前施設経由児童を一〇〇%にすることも容易のように見受けられるが、

実際は否である。

小学校は本校のみで現在三学級以下が二、一六六校、六学級まで見ると八、七九二校で、総数二四、五九二校に対し、前者は約一割、後者は三分の一以上ある。これらの学区の幼稚園を仮に前述の割合で測れば、七五人、または三八人以下の幼児数ということになる。すなわち幼稚園乃至就学前教育施設の一〇〇%普及を現実に目指すならば、当然に小規模のものも考慮されねばならぬだろうし、財政面からは、よりゆるやかな基準のものも考えられるべきであろう。小規模は教育上さしてマイナスにはならず、ゆるい基準にしても必ずしもつねに不都合になるとは限らぬのである。それゆえ古くから簡易幼稚園なる構想が説かれて来たのもことわりである。当時の幼稚園ブームに対し、むしろその乱立を防ぐ意味もあったと伝えられ、現に多数の公立幼稚園が未だ達していない、現行の高い基準は、幼・保の関連も含めて、全く新しい観点からの再吟味が必要であろう。

(教育関係の数字は文部省の「昭和四十八、四十九年度統計」に、ドイツの事情は雑誌「Blätter des Pestalozzi-Förderverbandes, 1975, Mai/Juni」244頁)

雨のさまざま

—平安文学作品から—

関根慶子



冬の間、一か月も二か月も雨が降らず、からからに乾いた日々に、ふと雨の音を聞きつけた時のほっとした喜び、そんな時いつも私の口について出るのは、

春よ起きよと神のたまえば

恵みの雨の静かに降りて

雪霜きえゆき

野山も目さめぬ

という讃美歌である。雨と共に春は来る。そして天地は一斉に目を覚ますのである。雨と言えば、こうした恵みの雨から、美しい風情を添える雨、陰鬱なうっとうしい長い雨、そしておそろしい猛威を振るって被害をもたらす豪雨にいたるまで、古代も今も

変ることがない。従って日本の古典に見られる雨も、同じくその種々相を描いているが、以下に平安時代の文学作品から、その幾つかを拾ってみよう。

まず古今和歌集春の部に、

わが背子が衣はる雨ふるごとに

野への緑ぞ色まさりける

(紀貫之)

というのがある。春雨の一雨ごとに野への緑色が鮮やかさを増して行くという、早春の躍動がリズムカルにとらえられている。わが背子(夫)の衣を張ると言って、その「はる」が「春雨」と掛詞になり、「衣」までは序詞であるが、そうした修辭上の技巧

が気にならず、わが夫の衣を張るという妻の心のときめきのようなものが、同時に春を迎えた心のときめきに響き合うようでないかない。

梅雨は、当時の日本では多く五月雨さみだれまたは長雨と言われている。平安朝の人々は、

服装や乗物などの関係から、そんな時期は家に籠りがちで、何かにその鬱を紛らわしたい。源氏物語帯木巻にある有名な「雨夜の品定め」と言われる段も、源氏君をかこんで集まった人々が、一日中降り暮らした雨夜のつれづれに、女性論に花を咲かせたのであるし、螢巻には、六条院という源氏の豪邸にいる女性群が、例年にもまさる

長雨にあきあきして、絵物語などのすざびに日を暮らし、書いたり読んだりに紛らしている様が描かれる。中でもそれに熱中している玉鬘姫の所へ、源氏が寄って来てひやかす場面があり、源氏の口舌を借りてかの有名な物語論が展開されたりしている。

次に五月雨（梅雨）の特徴をよくとらえた幻巻の一節を挙げてみよう。

五月雨はいとどながめ暮らし給ふより
ほかのことなくさうさうしきに、十余
日の月はなやかにさし出でたる雲間の
めづらしきに、大将の君御前にさぶら
ひ給ふ。花橋の月かげにいときはやか
に見ゆる香りも、追風なつかしけれ
ば、千代をならせる声もせなんと、待
たるるほどに、にはかに立ちいづるむ
ら雲のけしきいとあやにくにて、いと
おどろおどろしう降りくる雨に添ひて
さと吹く風に、燈籠も吹きまどはして
空暗き心地するに……

幻巻は、紫上追悼の源氏の悲歎が一年の展開に沿って叙述される。梅雨は一層源氏を暗鬱に淋しくするが、一寸した晴間に思いがけなく満月に近い月が、花やかに照らし出した。それは美しい紫の上がぱっと明るく生前の姿を現わしたかの如き一瞬であって、源氏の前には息子の夕霧も控えていて、彼も生前一目見た紫の上の曙の樺椽にも似た姿を偲んでいるのであろう。月光に映えて、雨に洗われた橋の花も紫の上の香りを漂わすが如く、死出の国から来るといふ橋にゆかりの時鳥の声まで待たれると思ふ間もなく、また急に黒雲に覆われて、ざあざあと物凄い雨脚がたたきつけて来る。さっと吹く風に軒の吊燈籠の明りも吹き消されそうになって、また空も源氏の心も暗く閉される。ここには、五月雨の暗さの中の一時の明るさが、紫の上のイメージに重ねて描出されるのである。

雨後のすがすがしさや、しめやかさの美

は、やはり古典文学の素材に好んでとり入れられ、源氏物語でも人物の登場に織りまぜて情緒豊かに描出されるが、ここでは枕草子「九月ばかり夜一夜降り明かしつる雨の今朝はやみて……」の段について見よう。本文を引用する紙幅はないので大要をしるすと次のようになる。——一晚中雨量も多くて降り明かしたが、朝になると打って変って朝日がきらきらとさし、軒近い植込みの草木はしとどに露を含んでいるのもいい。蜘蛛の巣があちこちにちぎれ残っている所に雨が玉のようにかかって輝いている。萩など水を含んで重く枝を垂れているのが、日が高くなるにつれて、誰も手もふれないのに突然枝が動いて、びよんとはね上がるのも何とも面白い。——こうした文章のあとで作者は、自分が面白いと言ったことでも、人は面白くもあるまいと思ふと、それがまた面白い、とつけ加えている。枕草子には作者清少納言の自然美に対

する新鮮な感覚や新しい発見が表出されているが、この一段もそうした箇所であると
言えよう。

この里も夕立しけり浅茅生に

露のすがらぬ草の葉もなし

(源 俊頼)

これは、夕立の過ぎ去ったあとのすがすがしさを詠み得た歌として知られ、觀察の確かさにもすぐれている。平安後期の新風歌人「俊頼」の作である。

一方、恐ろしい暴威をほしのままにする
豪雨の有様も、日記・物語等の諸作品に見

られるが、その最たるものは、源氏物語の須磨・明石兩巻にわたって描かれることを一言するのみで、紙幅も超過したので筆を置く。
(お茶の水女子大学名誉教授)

雨



森下博三

雨、それは空から降ってくる水滴であって、地上に降ってからは水という。降ってきたものが、結晶形を失わなければ雪とい、一般的には地上に積んだものも雪というが、気象学では区別して積雪という。そしてこの雨と雪が混って降れば「みぞれ(霰)」という。また透明な氷層と乳白色の乳層が交互になった、直径五ミリ以上の氷の塊であれば「ひょう(雹)」という。こ

れは摂氏零度以上と零度以下の気層の間をいったりきたりしたためで、雷雨のときなどにみうけられる。なお、冬に雪と一緒に降ってくる白色のもろい氷の塊を「雪あられ」といい、気温が摂氏零度よりも高いときに降るかたい氷の粒(ひょう)の小粒で、直径数ミリ以下のものを「氷あられ」といっている。そして、この雨、雪、雹、あられを全部まとめて降水ということになっ

ている。なんとも面倒なことであるが、もとをただせば全部同じ水という親元から出た兄弟分であって、ただ成長の過程と降る時の気層の条件が少し違うだけのことである。
ここで、雨が降るまでの過程を考えて見ると、地表や海などから微粒な水蒸気となつて、温かい空気におし上げられて上昇する。上昇するにしたがつて段々冷却し、

凝結して雲となる。盛んな上昇気流によってほとんど水蒸気が補充されて凝結量を増し、一層高くおし上げられて寒さにふるえながら水になったり、雪になったりする。段々と大きくなって、気層がささえきれなくなったとき、地球に向けて下降するが、途中の気層が温かかったりすると水や雪も融けて雨となる。一滴の雨でも、出来るまでには数百粒から百万粒もの小さな雲のしずくが集まったもので、中には地表に達し、ときに五、六ミリもある非常に大きい肥満児もあり、小さいものでは直径〇・一五ミリのものもあり、これは霧雨と呼ばれる。

では、雨雲が出来るための空気の流れ方について見ると、暖かい気流が冷たい気流の上のし上って上昇する温暖前線性のもの、冷たい気流が暖かい気流の下にもぐりこんで押し上げる寒冷前線性のもの、また暖気流と寒気流の間にあつて、両者の勢力が優劣をつけがたい状態で、その間にあつ

てあまり移動しない前線、すなわち停滞前線などの前線性のもの。低い気圧団に対して、周囲の気圧の高い部分から流れ込んでは、中の気流が上空に逃げ場をもとめて上昇するときに起こる低気圧性。また多量に水蒸気を含んだ気流が、山脈や台地にぶち当たって上昇気流を生ずる地形性のもの。それに地上の空気が局地的に暖められて対流を起こし、急激な上昇気流によって積乱雲を形成する対流性のものなどがあげられる。

私たちの生活する日本は、四方海に囲まれた細長い島国であることは、だれしもが承知していることではあるが、気塊についてしらべてみると、五つの大きな気塊に周囲をとりまかれていて、太陽から受ける日射量によってその勢力を張る時期が区分される。

すなわち、「冬」はシベリヤ大陸に発生した寒冷で乾燥した気団が卓越し、日本海

を渡る折に多量の水蒸気を吸収し、下から暖められて変質する。それが山脈に当たって急激な上昇気流を起こし、雲を作り、温度が低いために雪となって裏日本一帯に降る。前に述べた地形性の降水であり、山を越した気塊はもとの安定した性質となつて表日本に吹きおろし、行き過ぎて太平洋まで出てまた水分と温かさによって変質して雲を作る。

「春」はシベリヤと小笠原高気圧との間を低気圧が進み、前面に温暖前線を、後面に寒冷前線をもつ関係上、低気圧性と前線性の降水を見ることがなる。また季節風が弱まり、温帯低気圧が急速に発達しながら東進し、日本海を通過するとき、それに向かつて吹き込む多湿で暖かい南風によって地形性の大量の降水を見ることがある。

「梅雨期」は、冷たい北東気流であるオホーツク気団と、多湿で暖かい南の小笠原気団によって行手をはばまれ、長い間前線が

停滞状態を続け、その上を多湿となった揚子江気団（低気圧）が走るために、多量の降水の日が続くこととなる。最近ではこの梅雨現象はジェット気流と非常に関連が深いといわれるようになっていた。

「夏」は、暖かい湿った小笠原気団におわれ、それに強烈な日射を充分に受け、局地的に空気が熱せられ、対流が生じ、盛んな上昇気流によって強大な積乱雲を作り夕立現象となる。子どもたちのよく

唄う「母さんお迎えうれいな」の雨の唄も、その意味からすればこの夕立ちを指すのではないだろうか。

「台風期」夏の終局から秋にかけて襲来する台風は、赤道方面に発生する熱帯低気圧で、高温多湿な大きな空気のウズ巻きで、海の上を走りながら充分に水分を補充し、ウズの中心から一五〇キロメートルでは自身の渦動性によるものが多く、幾分勢力が弱まった折に生ずる前線による降水が見ら

雨



及川栄子

雨というと、うっとりしいイメージ……。それをいっぺんに晴らしてくれるように、色とりどりの傘をゆり動かし、色とりどりの長靴をはき、色とりどりのレインコートを着て、水たまりをパシャパシャしながら

登園して来る子どもたち。この子たちは、雨が降っても、活発にいろいろな遊びを見せてくれる。雨降りが数日続いた日のことであった。数人の子どもたちは、洋服がぬれるのもか

まわず、ペランダに出て遊んでいた。それはペランダの屋根から落ちる雨だれが、手すりにピシャンとぶつかって水しぶきが跳上がる。その中に、子どもたちはすばやくはいりこむ。身体ごと水しぶきがかかる。

（東京天文台）

「噴水だ！」と、彼らはうれしそうに叫んだ。水しぶきが四方に散ることと、つかの間のスリルを味わっている。何度も何度も。

また別の子どもたちが、雨水がペランダの手すりをつたわって、水滴が一つ、二つ、三つと、次々にできる。そのできたところを指でさわると、水滴が消えて落ちる。ゆっくり指を動かすと、水滴がポタリと静かに落ちる。早く動かすと、ポタポタと落ちる。そのうちに水滴の水が、腕をつたわって、洋服の中にはいりこみ、洋服がぬれる。それでも、子どもたちは、水滴とりをやめる様子はない。おもわず、一人が大声で、「ワー！」、ピアノを弾いているみたい。他の子どもは、同時に振り向き、また雨水のピアノを弾きはじめる。なるほど、私も実際にやってみるとおもしろい。

今度は、ペランダの屋根がたるまないように、ロープでピンと張らせている。そこを雨水がつつたわって落ちる。そのロープの

下に、あきカン、あきピン、チューブの入れ物などを置いて雨水を受ける。はじめは雨水がゆっくり落ちてくるのを待っているが、待ちきれずロープをしごくようにして、手をにぎり、雨水をしぼる。雨水がたぐさん出てくる。出なくなると他のロープへと移る。「牛のお乳しぼり見たい」と言う。その子は田舎に行つて、牛のお乳をしぼるところを見たと言いながら、一生懸命しぼる。たくさんの雨水がたまる。あきピンに入れ変える。「牛乳ができた」と走りまわり喜ぶ。大きいピン、小さいピン、チューブに入れ変えて、牛乳作りがはじまつた。

このようにして雨水が子どもたちに、喜びと、発見をあたえてくれた。「先生、頭と洋服がぬれてしまったの」と、子どもが言いに来るわけがわかった。

この遊びから、私もあらためて、七色に光る水しぶき、水滴がだんだん大きくでき

ていく様子を見ることができ、見ずじつにいた点、気がついても気にとめなかった雨水に、しみじみ見つけさせられた。また、子どもと雨水のかかわりあいに、思わず引き付けられて、教日間過ごしてしまった。

雨の日はつまらないと思つたのは、私の先入観であつた。子どもは、雨の日でも楽しく遊びを見つけて過ごしている。自然は、第一の遊び相手で、子どもたちの生活は、それを中心に発展し、また、自分自身への発見にもつながっていく。私も、よく子どもの頃は、てるてるぼうずを窓にぶらさげて、雨がシトシト降っている様子を、なにげなくガラス越しに見ていた記憶がある。

雨とは、子どもの心の何かをゆさぶり、ひきつけるものだと思う。

この雨降りの時にこそ、心静かに、子どもたちといっしょに、じっくりと眺めていたいものである。

(追浜幼稚園)

雨



徳丸吉彦

雨についてですって。楽しい、なつかしい思い出もありますが、なにしろ戦時中に小国民として育ったせいか、嫌な思い出の方が多いですね。かさが手に入らず、戦後大分たってもゴムの長靴を買ってもらえず、雨は本当に嫌でした。レインコートなんかは夢みたいな時期もありました。現在のように、さまざまな意匠のかさやコートが作られていれば学校に行くのも楽しかっただろうな、と思います。戦時中の疎開のときは、よくハダシで学校に行きました。もっとも、最近になって、ビルマのお寺の境内でハダシになることが多く、そのときは、なんの抵抗もないので助かっていますか。

雨といっても、かさをさす人の一寸したお行儀で、気分が楽しくも嫌にもなりません。人が一人しか通れない露地を両方から人がやってきます。一人はかさをさし、もう一人はぬれたままです。道をゆずり合うときだけでも、持っている方がかさをさしかけてあげます。相手もにっこりします。国によっては、こういうことをすると、変な男だという目で見られます。

雨といっても、かさをさす人の一寸したお行儀で、気分が楽しくも嫌にもなりません。人が一人しか通れない露地を両方から人がやってきます。一人はかさをさし、もう一人はぬれたままです。道をゆずり合うときだけでも、持っている方がかさをさしかけてあげます。相手もにっこりします。国によっては、こういうことをすると、変な男だという目で見られます。

相合がさを拒否するような感じで、それに粹なものだと思えます。

かさについてはまだあります。戦前に父がドイツみやげの折りたたみのかさをもっていて、それが欲しくてたまりませんでした。しかし、戦後は折りたたみのかさなどは、あたりまえのものになってしまいました。しかし、それにも国民性が関連しているように思います。日本の方は、キチンとたたまないでサックに入りません。しかし、すこし前から欧州で流行している西独のクニルプ社のものは、クチャクチャのままサックに入れます。その代り、サックは水を通さないしっかりしたもので、満員電車のときは、すぐにサックに入れてし

まいます。どうもこの方が実際のだと思
うんですが。

折りたたみはどこにでもあるものと思っ
ていましたが、ソ連ではみかけません
で。昨年でも売ってない、とのこと
が、ソ連人の趣味に合わないの
かもしれせん。

ソ連といえば、雨が降りだしたとき
に、自動車の中からワイパーを
とり出してつけ、雨がやむとは
ずしてしまいうのも、印象
的でした。

雨は音楽の質にも影響を与えます。
イタリアから安物ではありますが
ヴァイオリンを買ってきても
らったことがあります。五月
月のことでした。音が大きく、
よく透るもので、室内楽の
仲間がびっくりしてしまし
た。しかし、夏には膠がはが
れ、音質も音量も日本化し
て、だれも気にしてくれな
くなりました。

義太夫の三味線（太榊）を弾く人
には、

梅雨どきは、駒の調子が悪くなる
ので困る季節です。太榊用の駒は、
水牛の角で作りますが、重さを○・
一匁単位に調節するために、裏か
ら鉛のかたまりが打ちこまれて
います。これが、この季節にな
ると、ピンいったり、はずれたり
するからです。どうも嫌な話ば
かりですいません。雨がで
てくる詩、というとすぐ思い出
す詩があります。「陽関三疊」と
して愛唱されています。

渭城朝雨浥輕塵

客舍青青柳色新

勸君更盡一杯酒

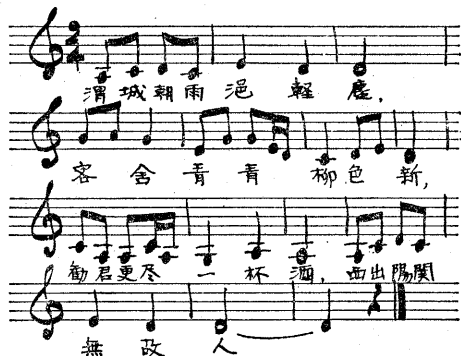
西出陽関無故人

この詩の冒頭の印象が雨上がりの
すがすがしさと受けとられたもの
ですから、なか、楽しい気分をも
って読んでいました。しかし、あ
る時、中国の友だちが、お別れ
に歌おうとしたのに、悲しくて
歌えなかったのをみて、初めて、
その意味が実感とし

てわかりました。しばらくして、
中国に戻った彼女から手紙と
ともに、旋律が送られてきま
した。その旋律を最後に記して、
雨についての感想を閉じさせて
下さい。

(談)

(お茶の水女子大学)



保育の中の

小さなこと大切なこと③

守 永 英 子

二月の誕生会を、二、三日あとに控えて、三、四人の子どもが、お菓子の入れたものを作り始めていた日であった。

その子どもたちのそばで忙しくしている私のところへ、S夫がやってきて、「小鳥のおかし入れ作る」と言う。「前から考えていたかのような、はっきりした意志表示だな」などと感じながら、私は、いろいろな思いをこめて「そう、どんなことにしましょうか？」と問い返した。というのは、

- どの程度具体的なイメージを持っているのだろうか。
- イメージがあるのならば、それを実現させてあげたい。
- はっきりしたイメージがなければ、イメージ作りの手伝いをしなければならぬ。
- “作りたい”というせつかくの気持ちだが、いま私の助力を

必要としている他の子どもたちにかまけているうちに、消えてしまわないように、せめて言葉だけでも受けとめて、意欲を持続させたい。

などの思いをこめた、問い返しの一言なのである。

しかしS夫は、それ以上の積極的な働きかけはせず、私のそばを離れ、少し遊んでは戻ってきて「小鳥のおかし入れ作って！」と言う。「どういうのにしましょうか」と言うのと、

「エプロンしてないんだよ」と言う。そういえば、十一月の誕生会の時は、「ほく」だよ」と言って作ったお菓子入れに、園児のようにエプロンをかけたようにしてあげたことがあった。そして、M子が、小鳥のお菓子入れをつくって「Sちゃんのようにして」というので、M子の小鳥にもエプロンをかけているようにしてあげたことがあった。どちらを覚えていたのか、とにかく、「エプロンをしてない小鳥のお菓子入れを作って」ということのようにであった。

S夫はひとりっ子で、子ども同志より大人に接触を求め、「先生、遊んで」「いっしょに、これして」などの要求が多い。自分から何かをするというより、大人にしてもらおうとする姿勢である。

「小鳥のお菓子入れ」も、彼の気持ちには、「やって」と私に要求するところまでのようであった。「彼自身の枠からもう一步踏み出してほしい」「どうしたらそれができるか」が、その時の彼に対して持った私自身の課題であった。

翌朝、登園して間もないS夫に「Sちゃんは、小鳥のお菓子入れを作るんだったわね」と声をかけると、「こうやって（羽をひろげて）とんでるんだよ」と、はっきりとした反応である。そこで園の玄関にある鳥かごを二人で見に行った。S夫に小鳥をみせるためと、私自身もヒントを得るために。

保育室に戻ってからは、S夫に働きかけながらの共同作業である。「小鳥のからだはどうする？　こういう箇のようなのにする？　それとも、こういうのが（なすび形のような）いいかしら？」子どもの側に積極的な考えがなくて事が進まない時は、私の方から案を出して、相手の選択にゆだねてみる。

「こう（なすび形）がいい」と彼はあっさり決め、「顔はどうする？」などの促しに彼の活動はスムーズに流れ出した。小鳥の円い顔が出来上り、乗って来た彼は、「足も作らなく

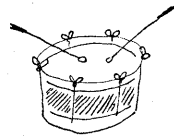
ちゃ」と言いながら、小さく切った四角い紙に、V形に線を書き込んだ。羽は、羽毛のような感じに短い線を沢山書き込んで、「出来た」と言う。羽の輪郭はなく、四角い画用紙のままである。「どうする？（小鳥の胴にあてて）このままつける？　それとも、もう少し小さくする？」と聞くと、S夫は、いつもの「できない、やって」を忘れたように、さっさと、適当な大きさに切った。顔をつけ、羽をつけ、足をつけて、小鳥が出来上った時のS夫のうれしそうな顔。自分の考えを実現し得た子どもの、満足に輝く顔に出会えることは、こういう仕事についているものの冥加かも知れない。（母親の話では、S夫は、小鳥にバタバタちゃんと名前をつけて、大事にしているとのことである。）

この満足は、自信につながり、また、子ども自身の成長の喜びにつながるものではないだろうか。彼の心の中にひろがっていた大人への「依存」にとつてかわって、自分自身の「成長の喜び」が大きな位置を占めていく日を心待ちにしながら、根気よく彼をささえ、見守って行きたいと思う。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

光の中に大人たちもいる

——独断的発達についての覚書——



大野松雄

はじめにお話ししておきたいこと

私は幼児教育、保育の専門家ではありません。また障害児教育の専門家でもありません。本職は、電子音楽などをつくっている、音響デザイナーです。ただ、人類の進化、

特に人類が何故直立二足歩行をするようになったのか、何故言語を獲得するようになったかに興味をもち、たまたま八年程前から、何人かの障害を持っている子どもたちと「つきあい」をすることになり、また、これもたまたま三年程前から、大津市の障害児保育の現場で、障害を持っていてる子ども、持っていない子どもたちと「つきあい」をすることになってしまった大人です。そしてつきあいの中

で、『光の中に子どもたちがいる』という記録映画——と

いうより、映像と音響によるレポート——をつくることになってしまった一人の大人です。この記録は、一人の障害を持つている子どもが、大津市の公立保育園に入り、一年の間にどのように変っていくか、そしてその子どもとかわる他の子ども——いわゆる「健常児」たちもどう変わっていくか、さらに、その変り合いの中で私を含めた「大人」も、どう変っていくか……を記録したものです。

私は今この作品を、子どもたちと育ち合う記録——と勝手に名づけています。私は、子どもたちから沢山のことを教わり、いろいろなことを私なりに発見したと思います。子どもの発達について、子どもたち相互のつきあい方について、大人と子どもとのかかわりについて……とくに大人

と子どものかかりについての面で、私は大変貴重な発見をしたと確信しています。そしてそのことは、いわゆる「専門家」の人たちには、意外に見逃ごされている面があると思われるのです。しかし、この事実の中に、子どもの発達についての「何か」があると考えられるのです。私は『光の中に子どもたちがいる』を通して学んだことを、これからお話ししようと思いますが、門外漢の私の話なので、多分に独断的なことになると思います。「専門家」のみなさんの御意見、御批判を受けたいと考えています。本題に入る前に、私が何故いろいろな子どもたちと、かわりを持つようになったかを、簡単に説明しておきたいと思います。

心の負債を背負ってしまったこと

子どもたちのきびしさをやさしさ

約八年前『夜明け前の子どもたち』という記録映画が製作されました。これは滋賀県にあるびわこ学園という、重症心身障害児の施設の療育記録映画で、私は音響スタッフとして参加していました。私たちは、「療育に映画が参加した」とか格好をつけて、また相当に気負って製作をしてい

ました。いよいよ編集も大詰めに近づき、私は録音機をかっいで、子どもたちのインタビュをとりました。子どもたちはみんな、大なり小なり言語障害をもち、車椅子に坐る時以外は、寝たままでないければなりません。聞きとりにくい話のやりとりの中で、私は次第に呆然とせざるをえない状態になってしまったのです。子どもの口から出てきたことは、ベトナム戦争批判、万国博批判、全国の施設の子どもたちとの連帯……これらが、十歳前後の子どもたち、それも障害をもっているために、学校へ行きたくてもそれを免除させられてしまった子どもたちの声だったので。話はさらに、現場の職員がやめていく問題——当時から、すでに腰痛などで職員の多くがやめていきました。せっかく慣れた職員がやめる、新しい人と変る。子どもにとって、これはいろいろな面で、大変苦痛を伴うことなのです。でも、驚いたことに、子どもたちの言葉の中には、批判めいた響きはなく、むしろ、やさしい、いたわりの気持ちを感じられたのです。この「日本」の現状に対するきびしさ、職員の現実に対するやさしさ……この現実を見すえた確かな視点を、まだ十歳にもならない子どもたち、それも障害児であるために、教育を受けられない子どもたちが

持っていたのです。私たちスタッフは、療育に映画が参加したとか何とか、結構弊がって一年間も現場にいたくせに、子どもたちの確かな眼について全く無知であったのです。さらに、現場の職員の大部分も、この事実には気づいていなかったのです。私たち大人は、えらそうなことをいうくせに、何故この事実が判らなかつたのだらう。私たちは——現場の職員も含めた私たち大人は、その事実には無知のまま、映画を製作してしまつたのです。このことは、私にとって、子どもたちへの心の負債として、私の中に長く残ることになってしまいました。

光の中の子どもたちとの出会い

子どもの発達とは何だらう

一九七三年、滋賀県大津市は全国の自治体に先がけて、障害児の幼稚園、保育園への全入制度を実施しました。いわゆる「障害児保育」が制度化されたわけです。そしてその記録映画『保育元年』が、大津市によって企画され、私もその製作に参加しました。私は、びわこ学園の子どもたちから借りた「心の負債」が、これで多少なりと返済できると思いました。しかし結果はその逆で、新しく出会っ

た子どもたちから、負債の上のせをさせられたような気持ちになつてしまつたのです。

よくよく考えてみると、子どもたちは単なる被写体、象物として扱われたに過ぎないのではないか。（もちろん、大津市も私たちは精一杯やつたつもりですが……）結局、大人たちが大人たちのために作つた……そんな気がしてきつたのです。これではやはり子どもたちの「心」を知ることができない。子どもたちの「心」を知るために、「心」の発達を記録してみよう。『光の中に子どもたちがいる』の記録は、こうして始まりました。

発達とは空間的有機的なものであること

デジタル的なものからアナログ的なものへ

前にも申しましたように、この記録は一人の障害を持つ子ども——カズエちゃんを中心に、保育園の仲間たちとのかわりを、一年間追つたものです。では、カズエちゃんの変化の主なもの、時間の経過に従つて書いてみましょう。一九七四年四月初旬、カズエちゃんとの初めての出会い。当時三歳十か月、前年の十二月迄歩くことが出来ず、まだ話し言葉はありません。障害の原因は、一時脳性マヒ

ではないかといわれましたが、一応不明ということになっていました。ただ、大変ふとっていてその時二十九・五キログラム。初めて会った時の感じは、愛想はいいが、まだ動作はにぶく表情の変化もあまりありません。でも、向けたマイクに一回だけですが反応を示したこと、そして、食事の後のけじめ——皿を重ねる、手を合わせてゴチソーサマをする——がついているのが印象に残りました。

五月一日、カズエちゃんが一月おくれで、保育園に入園する日です。ようやく歩き始めたばかりのカズエちゃんは、お母さんに手をひかれて歩きますが、歩道程度の段差の上り降りも、相当のエネルギーを使います。少しの歩行でもう足が開き、まだ指さしが出来ません。友だちとの最初の出会い。おたがいにとまどっているようです。カズエちゃんは、相手にさわってたしかめています。子どもたちは、カズエちゃんが寄ると、わっと逃げます。でも逃げたままではなく、直ぐにまわりを囲みます。一人の子どもがちょっと押すと、足の弱いカズエちゃんは、どすんと尻もち。先生は、先ず子どもに起こさせます。遊戯が始まっても、まだみんなのリズムに入っていないけません。大体一時間半位であぎがきます。しかし親子教室などですでに学習し

て、自分の興味のあるもの——むすんでひらいての手を叩くところ、オルガンの音色等——には反応を示し、また、新しい世界をあちこち「探検」していました。

六月中旬、カズエちゃんはお母さんの手をはなれて、一人で歩きます。歩くためのエネルギー消費が減ると、「ゆとり」が出て盛んに道草をします。情報の入力が増大しています。ちゃんと指さしが出来ます。そして、保育園の門迄くると、小走りにみんなの所へ走っていきます。カズエちゃんは、新しい世界が気に入ったようです。遊戯でも、先生や友だちを観察してついでいこうとします。この頃になると、自然なかたちでカズエちゃんをサポートしてくれる、「友だち」が現れます。遊戯では、大分走れるようになり足の力がついたカズエちゃん、まだ腕の力、指の力が弱く、ブランコは無理のようです。スベリ台に興味をしめしても、段を登ることが出来ません。その興味を、すべり台の下り口に坐り込む、逆に登ろうとするルール違反で表現しようとしています。ルール違反を友だちに止められると、自分のおなかを叩いて泣きます。またすべり台に登れない口惜しさを、先生に抱きついて泣くことであらわそうとします。歩けるようになった自信と、新しい世界への興味が

ゆとりと好奇心を生み、道草、他人の観察、友だちのサボ
ート、ルール違反を止められる……等から、情報量は着実に増大しています。また、すべり台ですべりたい気持ち
を、別の形で表現する。先生に抱きついて泣く——等の情
報入力に対する出力、つまりフ、ィ、ド、バ、ックの芽生えが見
られます。

七月上旬、まだ梅雨時。雨にぬれてカズエちゃんは歩
きます。保育園の門をくぐると、その顔はニコッとほころび
ます。みんなの真似をして紙を折ろうとします。先生に叱
られて、床を叩いて泣きます。友だちの粘土をとりあげる
など、いたずらをするようになり、でも最後はちゃんと返
します。何か仕上げると、嬉しそうに手を叩いて喜びま
す。食事の時も、みんなで「イタダキマス」という迄、待
つことが出来るようになります。しかし、フーと吹く息の
方は、まだ出来ないようです。カズエちゃんは、園での生
活が次第に自分のものになりつつあるようです。感情表現
も豊かになり、前は自分のおなかを叩いて泣いたのが、こ
の頃は床を力一杯叩いて泣く——感情を表に向ける——ア
ウトプットの回線がたがります。こうして、いたずらを
する、取りあげて返すという、友だちの間での、フ、ィ、ド、バ、

ックの關係が成立し始めます。そして床を力一杯叩く、粘
土をべたべた叩くという一連の行為が、次第に腕から指に
かけての力をたくわえていくようです。また、半日保育で
あったのが、昼寝を入れての全日保育に切り変わったことで、
エネルギーの発散、蓄積、発散のバランスが、うまくとれ
てきたようです。

七月下旬、初めてプールに入って友だちと水のかけっ
こ、色水遊びというボディペインティングごっこで、体に
絵具を塗ったり塗られたり。つまり、フ、ィ、ド、バ、ックの關
係が定着します。ブランコも先生にのせてもらいます。そ
して、これも先生に助けられませんが、とうとうすべ
り台に登り、すべり降ります。

八月上旬、びわ湖の湖水浴で、カズエちゃんは昼のおべ
んとうの残りを、紙で包みます。浮輪につかまり、体を斜
めにかたむけた姿勢で、足で水を力一杯かきます。

そして八月下旬、カズエちゃんは遂に、「バブバブバブ、
ジャブジャブジャブ」等、話し言葉の前段階に達します。
入園して四か月間、カズエちゃんの変化を見ると、
子どもの発達とは、決して直線的・平面的なものではなく、
もっと空間的・有機的なものだと思います。何か一つのこ

との完成——それがたとえ僅かなことでも——が、ゆとりと自信を生みだし、それは情報量の増大をもたらします。

その増大が情報の出力をうながす時、友だちのフィードバックの関係が成立します。私はカズエちゃんの変化を見て、このフィードバックの関係の成立が、大変重要なのではないかと思いました。何故ならこれらのことは、「心」だけでなくむしろ「心」の発達は、体全体の発達の中での相関々係——つまりフィードバック——が、外部とフィードバックする間で、さらにフィードバックを起こす——何だか大変ややこしい言いまわしになりましたが……だから私は、子どもの発達とはより空間的、有機的なもの、言葉を変えて言えば、デジタルなものでなくアナログ的なものではないか、と考えるのです。

ヨコのフィードバックからヨコナタテの

フィードバックへ

カズエちゃんは四か月の間に、友だちと相互のフィードバック、つまりヨコのフィードバックは成立する迄になりましたが、まだ先生など、大人へのアプローチ、つまりタテのフィードバックは成立していませんでした。これで

は、発達の空間としては不完全です。カズエちゃんと大人との関係は秋から始まります。しかし残りの紙数があまりないので、いささかハシヨットお話しいたします。

秋に入ってカズエちゃんの足は、ますます丈夫になり裏山への園外散歩も、ちゃんと歩いて登りきります。言葉らしきものも大分増えてきます。十月初めになると、体操などで自分の能力的弱点を予知して、カズエちゃんの方から、先生に助けてもらいにいくようになります。大人へのアプローチの始まり、タテのフィードバックが芽生えます。いたずらも、すきを見つけて人のものをさっと取り上げる——判断と行動のバランスがすっかり身についてきます。時には度が過ぎて、友だちにヒツパカれます。カズエちゃんは泣きながら先生に訴えにいきますが、その原因がカズエちゃんにあることを、逆にたしなめられます。ここではヨコとタテのフィードバックが、それぞれ作用し合っています。大人へのアプローチは、十二月に入ると、先生がやっている雑巾がけを自発的に手伝う、そして雑巾のしぼり方や拭き方を教わるといふ所迄発展します。いたずらも、十二月中旬を過ぎると、止められることを期待して、わざと……遊びの気持ちがあられ、また、人のすきを見

つけてのいたずらは、年が開けると椅子をさっと引いて、尻もちをつかせる迄になります。この一連の行為は、いたずらというより、「ためす」という感じになっています。話は前後しますが、ブランコは十一月に入ると、一回か二回自力でこげるようになります。その頃になると、遊戯は何とかがついでいけるようになり、「つもり」の行動が出てきます。たとえばスキップ。カズエちゃんは大変ふとっている割に足首が細いので、飛ぶことは苦手で、まだスキップはちゃんと出来ません。でもスキップをしているつもりで、リズムに合わせてみんなの前で動きます。そして区切りがくると席に戻ります。自分の限界一杯に、遊戯のリズムとみんなのリズムに合わせ、表現しようと努力しています。年が開けると、カズエちゃんの大人へのアプローチは、先生ばかりでなく私たちスタッフにも向けられます。カメラマンが撮影していると寄ってきて、レンズをじっとのぞき込みます。撮影を続けながらカメラマンが、「ヨイ・ドーン」というと、くるりと向きを変えて走り出し、ある所迄いくとまた走って戻り、再びレンズをのぞき込みます。ブランコは、二月に入ってとうとうこげるようになり、三月になるといろいろ向きを変えて、工夫しながらやる迄にな

ります。そして三月中旬、風邪をひいて休んだというので、お見舞いにいった私たちスタッフの前で、遂に「ドッコイチョ」と言いました。

カズエちゃんが一言喋る迄の一年間、カズエちゃんはそのごく沢山の物を見、音を聞き、物にふれ、人に接します。何度もくり返すようですが、情報量の増大、自身のフィードバック、友だちとの、大人との、そしてヨコタテのフィードバック、さらに、それぞれが相互にフィードバックし合う中で、量的に蓄積されたものが質的变化をとげる……カズエちゃんの「ドッコイチョ」の中にそれを感じ、人類進化の長い営みを感じました。大分前になりますが、今西錦司さんの本に、「人類進化の中で、直立二足歩行と言語の問題は、立つべくして二本足で立ったのであり、話すべくして話すようになった……」とあったのを読んだ記憶があります。その時は、その意味がさっぱり判りませんでした。カズエちゃんの「一言」を聞いて以来、おぼろげながら判るような気がします。

子供と大人との関係について
もう一つのタテとヨコの関係

紙数ありませんが、もう一つふれておきたいことがあります。それは初めにお話した、子どもの「心」を知る問題です。「専門家」の方々にとっては当り前のことかもしれないませんが、これは、私と子どもたちのかかわりの出発点でもあるので、私なりの考えを簡単にまとめてみます。

結論から先に申しますと、私たち大人は、とかく「大人」として、タテの関係のみで、子どもたちと接しているのではないだろうか。「大人」が子どもたちと友だちとして、つきあうという、ヨコのつきあい方も必要なのではないでしょうか。もちろん、「大人」としての経験や社会ルール等を伝えていく、というタテの接し方も必要です。しかし、それもヨコのつきあい方がなされていなければ、子どもたちによりよく伝わらないのではないかと思われれます。ヨコの関係の中で、子どもたちは「心」を大人に向けて開いてくれる——そんな気がします。

私の貧しい経験でいうならば、カズエちゃんの初めての言葉、「ドッコイチョ」は、私の前で出てきたものです。

これは、私とカズエちゃんとの友だち関係の中で出てきたと思われれます。実は私は、この記録を続ける中で、なんとかカズエちゃんと友だちになれないか、と考えていまし

た。そして以前、びわこ学園の子ども——脳性マヒとちえおくれを伴っている、いわゆる重症心身障害児——たちに試みたことを思い出しました。みんな話し言葉はありませんが、よく唇を合わせて「ブー」とか「ブルブル」とやっているのを見て、何となく眼を同じ高さに合わせて、その真似をしてみました。すると、大変喜んで反応するので、真似をして遊んだことがあります。子どもは大人の真似をして、いろいろなことを覚えていく。「大人」が子ども、真似をする、とどうなのだろう。八月のびわ湖の湖水浴の夕方、カズエちゃんの「しぐさ」の真似をしてみました。はたして、カズエちゃんの反応は大変なものでした。キャッキャと喜んで、いろいろな「しぐさ」をします。それを私は直ちに真似をします——眼を合わせ、なるべく姿勢を低くして……そのうちに、カズエちゃんは私のタイミングを外そうとしますので。私はこの時、カズエちゃんにつきあえたと思いました。

二度目は、九月の遠足の時。昼のおべんとうの後、カズエちゃんはそれ迄しゃぶっていたペロペロキャンデーを、私の方に差し出しました。私はそれを口に入れてしゃぶり、再び返すと喜びようはものすごく、そのあと何回か、

私とカズエちゃんの口の間を、ペロペロキャンデーが往復しました。

三度目が例の「ドッコイチョ」になるわけです。丁度この頃、カズエちゃんの大人へのアプローチは先生だけではない、私たちスタッフにも向け始めた時でした。風邪もすっかりよくなって、弟と一緒に隣の家のガレージで遊んでいました。私たち「大人」が遊びにいったことが、カズエちゃんには思いがけない喜びだったようです。ごあいさつのと、私は早速カズエちゃんの声を真似しました。しばらくやりとりがあつて、カズエちゃんがしゃがもうとした時、私は思わず「どっこいしょ」と言いました。するとカズエちゃんは「ドッコイチョ」と答えてくれたのです。私とカズエちゃんは、この三つの段階をふんで友だちづきあいをするようになった……というわけです。

子どもたちは自身で光り輝いている

「大人」も光の中へ入れてもらおう

『光の中に子どもたちがいる』を記録する中で、私はたくさんのお話を教わりました。そして「子どもたちと育ち合う」ということが、実感として判つたような気がしま

す。完成後、多くの御意見や御批判を頂きました。その中に気になるものがいくつもあります。その一つに「光の中……」の光源についてのものです。私は、光源は子どもたち自身と考えています。障害を持つ子が持つまいが、子どもたちはみんな「光」です。子どもたちは自身の光で輝き合っているのです。ところが、恵まれない子に、大人たちが光を当ててやらねば……という考え方が、意外に多いのです。「大人」たちは、少しうぬぼれが強すぎるようです。「大人」たちが子どもたちにしてやれることは、みんながもっと輝くよう手助けをする……精々その程度のことではないでしょうか。私たち「大人」は、子どもたちを「指導」したり「教え」たりする前に、まず子どもたちと友だちになりましょう。「大人」たちと「子ども」たちが、タテとヨコの関係で結ばれた時、相互のフィードバック作用は、きっと「大人」たちを「発達」させるでしょう。その時「大人」たちは、初めて「子ども」たちに照らされるにぶく輝くでしょう。惑星が恒星のおかげで光るように……。そして「光の中に大人たちもいる」状態が出現し、子どもたちはやっと安心して、光をうたい続けられるでしょう。

(映画製作者・総合企画)

学校訪問旅行記(その二)

——アメリカの多様な施設を中心に——

村 田 修 子

アメリカは、私共には想像ができないほど人種問題が教育問題にのしかかってきているようです。小じんまりとしたユティカ

であるとしていることが、随所、随所でうかがわれました。

く、言葉を使うことの少ない家庭の二年生から六年生の子どもが、早く一般の子ども

市でも、七八%は黒人・プエルトリコ系の人というので、これらの人たちの生活は貧しく、その上子どもの数も多いので両親

言葉を豊富に使って正しく話せることは社会性の発達にもつながり、ひいては幸福な生活を営むことにかかわりがあるからです。

と同じレベルになれるように特別の指導をしているところで、ユティカからこういう子どもが集まってきて、学年に関係なく教育を受けています。診断をする本によつて、聞き方、読む力、記憶のテスト、視覚

とも働いている家庭が多いのです。従ってゆつくり子どもにふれている時間も少なくて、話し合うことも仲々ないので、「言語生活が貧弱で現在は正しく話せる人が少なくなつた」とある先生がなげいていました。

これは市、州でもやっていますが、国の方針として取り上げられているのです。それで次にあげるような機関が設けられていたこともうなずきました。

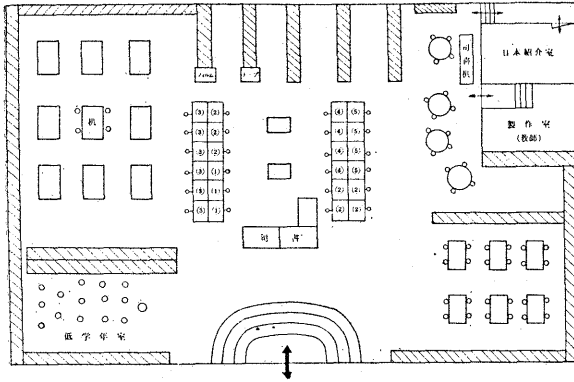
のテスト等をして発達の段階を調査し、個々のカルテを作り、それにもとづいて徹底した個人指導が行われます。

こうした現状から、話すこと、書くこと、読むこと、数えることの基礎を身につけさせ習慣化することが一つの大きな課題

オリディング・クリニック
知能は普通に発達しているけれども、言語生活が貧弱な子どもや、家庭環境が悪

私が見学したときは、六年生位の子どもが視聴覚のいろいろの機器を使つたり、学習しているものの関係図書を探したり、それについての質問を補助教員にしていた

◀メディア・センター



/// 図書資料

- ① フィilmストリップリデューサー
- ② テープレコーダー
- ③ レコードプレーヤー
- ④ スライド映写機
- ⑤ ビデオユニットカートリッジマシン

り、そのわくの中で自由に活動している中から、交代で一人ずつ隣の机の先生のところへ行って指導を受けていました。また、プエルトリコ人が多いので、スペイン語も平行して指導し、その正しい読み方や書き方も人体の各部の名称を教材にしてやっていた。

もう一つこれと同じように、教材・教具を使って学ぶことを主体としたセンターが各学校にありました。

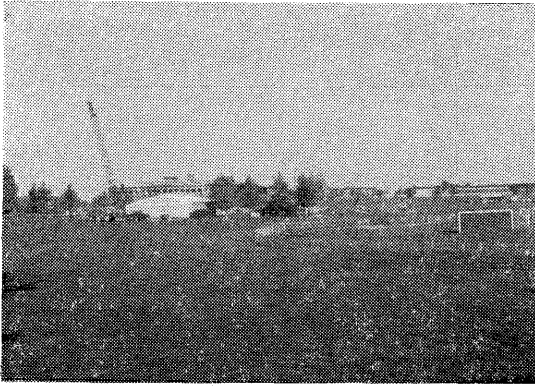
○メディア・センター

図を見ても分かるように、普通教室の七倍位の広さの中に、単に本がある図書館というイメージではなくて、子どもたちが持っている多様な関心、欲求を満たすために自由に利用できるさまざまな資料が整っていました。視聴覚センター、とでもいうものです。

今迄あげてきたこの二つのシステムからおし計ってみても、書くこと、読むこと、話すこと、数えることが如何に重要視されているか、ということがよく分かりました。見せて下さる側にしてみれば、いろいろな問題に対処させている方策などを見ても、いろいろの形と工夫が出てくるので仕方がないことと思いますが、その中で子どもたちは自由に活動する形態をとりながらその課題に取り組んでいるにしては、余り楽しそうな顔付きをしていないことは少し気になりました。

空港についたとき広々としていることに感心したと同じように、すばらしく広くひらけた一面芝生の運動場のため息をついたのですが、その中にほんの少しの子どもたちしか見当たらなかったことは、うらやましいというよりは何となくもつたいない

◀ 広々とした校庭



感じてした。

日本の先生方はみな思いは同じだったのでしょう。「ここへうちの子どもたちを連れてきて走り回ったり、ごろごろころがったりきつと目を輝かせて仲間やめないでしようね」とか「あの美しい紅葉した葉っぱを拾ってきて、毎日家に持って帰るでしゅうね」等々、絵のような景色の中に、るすをしていくれる子どもの姿を置いてみて、センチメンタルな感慨に浸ったこともありました。

国が違えばいろいろな制度が異なるのは当然です。アメリカの学校制度のうち私共の概念とちがうことは、キンダー・ガーデンに通っている子も、その他の施設に通っている子どもも満五歳になるとすぐ小学校にかようようになるので、そのどちらにも五歳児が存在しています。

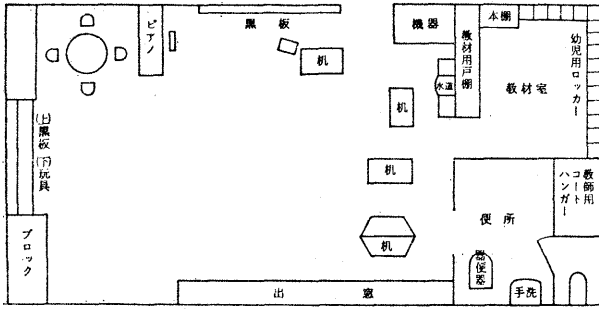
私共の視察団は、幼稚園関係の者のほか

に教育委員会や小学校の校長先生方がまぎっていらっしやったので、多分最初は「幼稚園班」に属されたことについて、物足りなく思われたかも知れないと思いますが、時がたつに従って、この団の参観計画の有意義さをみんな感じましたので、よくそのことについて話し合われました。極く少数であったにしても、幼児の教育について関心を持って下さった先生方がふえたことを、私はとてもよかったですと思いました。

それは、幼、小、中、高……の一つ一つの教育はそれぞれが孤立しているものではなくて、基礎となる前段階の上に積み上げられていくものですから、とかく横に線を引かれてしまいがちです。前出のマルチ・エイジ・グループ・ピングというのもそのへんを見ることができました。

そのほか設置者によって呼び方の異なる

◀ プロキュアールのプレイルーム



いろいろの施設を見せてもらいました。

○プレ・スクール

教会によってたてられたもので、利益を目的としない。

学校で教えるようなことは教えないで、大部分の時間は自由に遊ばせておいて、その中で筋肉の発達を促し、子どもの状態に応じて指導してゆく。

学校の方針として、学校と家庭を親密なものにすることに重点をおいている。

○プロキュアール

カトリック系の私立のミッションスクールである。

参観したあとの懇談会で聞いたことの内容容としては、

1 フリープレイを主体とする。……子どもに興味をわかせることや個性をのぼすために自分を中心になってアイデアを考

えて、自主的に、創作的にいろいろなことを体験させることにとめる。

2 毎日十五分間体育館で運動、あそびをする。

3 宗教関係のものを十分から十五分とり上げる。けれどもこれらはその時の状態によって予定が変更になることもあって、その場にあった適切な指導をする、ということである。

○F・E・A・T

Federal Educational Achievement Team
は、連邦政府が資金を出して、教育のため教師、教材を提供している組織です。

ユニイカで力を入れている読むこと、算数の方面について援助してもらっている、ということ、よく研究された教材、教具を使って、徹底した個人教授がされています。

◀ プロキユアルのフリープレイ



○ ヘッド・スタート

九月一日現在で四歳に達した、貧困家庭のためいろいろの面で自信をなくした子どもを対象に、一学級十五名位に教師一、ヘルパー一、ファミリーワーカー一、という陣容で指導されています。

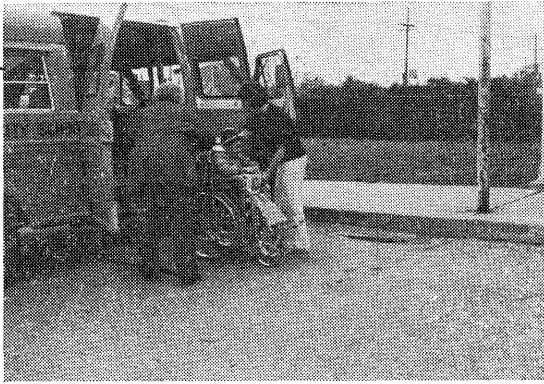
この名前を聞いたとき、私は全然逆のことを考えました。教育をして刺戟を与えることによってぬきん出るようにすることかと思っただけですが、説明を聞きますと、就学前の子どもたちがあるレベルに達するようにするために、みんなスタートで頭がそろるように設置されたのだそうです。これは本当に一人を大切にアメリカ的な考えであり、私のふと考えたことは、なんと日本の競争的な考えが身にしみこんだものだろうとわれながらあきれてしまいました。そしてそこでも黒人系の子どもが大部分で、スペイン語を使用している子どもが英語の単語のカードを目で見えて指でたしかめ

てことばを覚えていたり、知能と関係が深い（と説明をしていた）マットでころがる遊びや円木の上を歩いたり、自転車遊びをしたり、ままごと遊びをしていました。その遊びはそれと目には日本の幼児がしている活動とちがわないのですが、そういう気持ちで見ると、その雰囲気はそういう遊びを学んでいる、という感じがしました。

全くアメリカの抱える人種問題の大変さを今更のように知らされました。

次に心身障害児のための教育機関、ハンディキャップについてですが、現在ユティカでは心身障害児と普通児は同じ場で教育するという方法はとられていないというところで、創立十年という連邦政府によって建てられたミッション・スクールの八つの部屋を見せてもらいました。

▲ハンディキャップの送迎バス



1 足の悪い子の歩行訓練をしている。補助歩行器を使って歩くのを一対一でしている。重症児二名に二人の教師が指導していた。

2 足が悪く、しかもIQ七五以下の子十名、教師三名（専任一名、他の二名は助手）。カップ、ということばを言わせる。実物にふれさせて訓練しているが、抱えなければ移動することができない子もいる。

3 2と同じで、クッキーということばの訓練で、一人が順番にみんなにクッキーをくばって歩く。クッキーをつまむこともなかなか困難であるし、倒れることもあるので、ヘルメットをかぶっている子もいる。三歳児四名、教師四名。

4 十歳から十二歳迄の六名、教師二名。足、耳が悪くて目が少し見える子が車椅子で一人でスライドを見てことばを覚えていた。気が散らないように、三面につ

いたてのようなものでおおわれたオフイスと呼ばれるところがあり、そこでそれぞれが活動をしている。

5 七歳から十歳の子六名、ティーチングマシンで発音訓練をしている。

6 心と体にハンディのある子六名、教師二名、歌いながら一人ずつ横に位置をかえて、ワン、ツー……を教えていた。

7 IQ二五―五〇の子十名、教師二名、フィンガーペインティングをしている。

8 IQ五〇―七五の七歳から十歳の子七名、教師二名。この子どもたちは「教育すれば救われそうな子」が集められていて、お面作りをしている。

ユティカの教育についての概要を第一日目の朝話されたとき、係の方が開口一番、「ユティカの教育は多様であります」とおっしゃった通り、こうしてあげてきただけでも十以上もありました。

そして、それらをすべて見るようにスケジュールが組まれていたので、午前二つ、午後二つ、それに加えて催しもの（市内見学、市長との会談とか個人の家の訪問）に参加したために、ともすると見せて頂いた学校や先生方が混乱してしまいました。

見学しているうちから心がけて、何等かの特徴を頭に刻みつけるようにし、意識的に手帖に絵を書いたりして、あとでそれを見たときに思い出せるようにしましたが、その日のことはその日のうちに整理してしまわないとだめでした。

* * *

このようにスケジュールがびっしりとつまっている、ということは、受け入れてくれる側が心を込めて全市をあげて歓迎してくれていることです。夜九時頃まで会合で世話をした下さった先生が、次の朝八時にはホテルのロビーに美しい顔をそろえ、

その日のスケジュールなど説明してくれて引続き一緒に行動してくれるのです。これが五日の滞在期間中ずっと続きました。

私は、若しこれが逆の立場だったとき、このような至れりつくせりのもてなしを、相手の心に響くようにすることができたらうか、と考えましたし、アメリカという国に対して抱いていた自分の感じが、何となくかわってきたことからして、ちょっとしたことでもその第一印象というものができてくるものだと考えると、恐ろしいことだとさえ思いました。本当に反省させられた人とのふれ合いの日々でした。

私にとってアメリカ人とのふれ合いのクライマックスは、個人の家庭を訪問した一夜です。

ユティカでの最後の夜、二名から四名のグループに分かれて、それぞれ指定された方の家を訪問しました。招待された家も多

種多様で、ある方たちは、訪問した家の老夫妻が競馬場（日本の雰囲気とは違い、食事しながら楽しむのだそうです）につれて行ってくれて撃駕^{げが}レースを見て、その方たちと同じように券を買ったら当たった、という方などがあつたりして、あとでそれぞれの経験はなしに花を咲かせましたが、私は四人のグループで、教育委員会のいつもお世話して頂いているエイクオラー女史のお宅でした。

私共がユティカに滞在し忙しく過ごしている間中、木々は紅葉し、到る処絵になるようなビューティフル・デイでしたが、その日も黄色に埋まったその中を迎えられた車で進むとき、

秋の陽のウォロンのため息の身にしみて

ひたぶるに うら悲し
鐘の音に胸ふたぎ 色かへて
涙ぐむ過ぎし日の想い出や



◀ エイクオラー女史宅訪問

げに我はうらぶれて

ここかしこ定めなく

飛び散らふ 落葉かな

(ヴェルレーヌ作、上田 敏訳、『海潮音』より)

御一緒の三宅先生の口から昔覚えた詩がほとぼしり出ました。何十年も口にしなかつたという詩が出てくる、ということも、

招待されているという心楽しき、リラックスした状態にあるときに、この美しさに感動してほとぼしり出たものと思われず。

ユティカ郊外の林の中にある真白い家の前についたとき、「おお、ホワイト・ハウス」という感嘆の声にエイクオラー女史はじめ一同大笑い。そこで一緒に住んでいるという大柄な六十歳という陽気な方に迎えられる、家中くまなく(バス・トイレから寝室まですべて)案内して頂き、四人は片言英語で感心したり質問したり記念写真をとったりしてから、あらかじめ作ってあった

ごちそうを分担して持って、幼稚園の先生の家へ向かいました。

そのときも、鍵の二重になっている嚴重な様子とか、リモコンで開閉できるガレージのあけ方などまでも見せてくれました。ということは、第一級のもてなしだということをおあとで聞きました。

訪問した先生の家には、三、四軒の家族が集まっていた用意が整えられていました。サンクスギビングが近いというので、それと総て同じように整えてくれたので、七面鳥の丸焼きも用意されていました。

建国二百年ということもあって、メイフラワー号の話の出ている本があって、三宅氏はエイクオラー女史のお友だちの方にかまって隣に掛けさせられて、一行ずつその本を読まされてしまいました。にやにや笑いなながらその様子を見ている他の三人の前で二頁ほど読むうちに、たまりかねて立ち上り「アイ・アム・ハングリー」とジェ

スチュアをまじえての叫びに、一同大笑いののち、お祈りからパーティが始まりました。

手製のかぼちゃのお料理、手作りのトマト、とっておきの貴重なお酒、等すべて心のこもったもてなしでしたし、その心づかいが胸にひびきました。たった三時間位の、しかも十分に話せない、両方とも首をかじげたり、絵を書いたりのひとつでしたが、別れの歌をうたう声がかすれ、涙を浮かべて別れを惜しんで下さる様子に、私たちも光景の霞む思いをしました。

右左のほほに、情愛のこもったキスを順々にしてくれました。

この心あたたまるもてなしは、学校を見たときより以上に人とのふれ合いの大きさ、不思議さを感じさせてくれました。

このひとこまの記録は、私にとって脳裡から一生消えることはないでしょう。

このハードスケジュールの中で、次第になれていった、とはいっても、初対面の人が多い旅行でそれとなく気をつかったことも、お互いのちょっとしたウィットによって随分気分がやわらぎました。アメリカへ向う機中で、

●「なんだか随分ひどい雨ですね」話しかけられた先生は「え!! 今一万メートルの上空をとんでいるんですよ」「ああ、そうだった」

●「日付変更線の上を通ったの知っていますか?」「いいえ、よくねていたものですか」とまじめに答えると、「ガタン、と音がしたのですが、分かりませんか?」「!!」(まわりの人も大笑い)

●空港で荷物を下ろしているところにセパードがいて、荷物の上を忙しくいつたりきたりしている。「日本では猫の手をかりるのに、アメリカでは犬の手か!!」

これ等は最初の頃なのでやや固い感じが

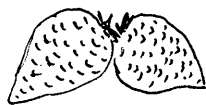
しますけれども、このような会話や一人言がどんなに気持ちリラックスさせてくれたか分かりません。

ホテルのおじさんたちも、早朝荷物を運ぶのにエレベーターが仲々自分の階にこないときなど、腹を立てるより、「エレベーターはまだねている」等と気軽に言っかけてゆったりとしている点などは、学校訪問とは別に、大変よい勉強になりましたし、異なった場での経験の大切さを感じました。(つづく)

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



三つ子の魂（下）



外山 滋比古

離乳語—その一—

赤ちゃんには母乳を与える。しかし、いつまでもおっぱいをやっていると、発育によくない。母乳というのは一見何でもないようなものですが、総合栄養が入っています。病気に対する免疫まで入っているということです。そういうすばらしい母乳でも、あまり長く与えておきますと、発育に必要なものが不足してまいります。そこで離乳をやります。どんな呑気なお母さんでも、離乳をいつするかということを考えないお母さんはいないと思います。しかし、お母さん言葉をいつ離乳させるかということに関して関心をもっているお母さんはほとんどありません。大体母乳語などを考えているお母さんがいないのですから、離乳語など考えないというのは当然かもしれません。

この母乳語から離乳語へ移る、移り方というところが、子どもの知的発達最初の関門であります。ここをうまく越せませんと、総領であれば甚六になりますし、次男であっても甚八ぐらいいなってしまうのです。それではどうしたらいいかと申しますと、二つありまして、一つは子どもと母親の関係を少し遠ざける、かわいい子どもと徐々に距離をとっていくという、移行が大切なのであります。

母乳語だけで育っている赤ん坊は、しばしば母親以外にも同じような人間が存在するという実感をもたないで生きている場合があります。その場合に、他の人とのコミュニケーションをなるべく多くする。よく、赤ん坊は人見知りをして泣きます。するとお母さんは「私じゃなきゃだめなのよ。よその人だとすぐ泣くわね」と、それを助長して得意になっている。そういうことをして

いると、よその人の言葉がよくわからない、よその人の言葉に耳を傾けないような子どもになってしまいます。それで、ある年齢がきたらなるべく他の人たちにふれさせる。兄弟がたくさんありますと、この離乳語がごく自然に行くのであります。子どもの世界が広くなります。一人っ子が扱いにくいというのは、この離乳語が十分できていないためにおこるのです。一人っ子でも離乳語がきちんとしておれば、一人っ子の持っている我儘な、自己中心的な社会性の欠如ということがおこらなくてすむわけです。

急に母子関係を切りますと、子どもはノイローゼ症状をおこします。典型的な例は、上の子がまだ離乳語の前後の時に下に子どもが生まれるという時、これでお母さんたちが失敗している例がたくさんあります。昨日まで子どもと母乳語を交していたお母さんが、ある時突如として「あなたはお父さんのところへいっていらっしやい」といって、生まれた子どもに夢中になります。すると上の子は、お母さんは裏切ったと思わないで、小さいあの子がお母さんをとったと思います。その赤ん坊を敵視してはじめます。するとお母さんはムキになって、「何ですか、あなたはこの間までいい子だったのに、急に悪くなっちゃったわね。本当にいけない子！」などといえますから、上の子は救われないわけです。

母乳語から離乳語への切替えがあまり唐突ですと、こういうふうには子どもはショックを受けます。小さな子どもですから辛うじて持ちこたえています。もし大人だったら自殺する人がある位のショックでありましょう。よく兄弟喧嘩が一ぺん大人になってからおこると、なかなかおらないというようなことを言いますが、いま申したと関係があると思います。したがって、年子などという場合は、非常に早くから気をつけて離乳語にきりかえるということをしなければいけません。

離乳語というのは、社会性を言葉によってつけるということですよ。よその人を見ても泣かない。友だちができても勝手なことをいわないで仲よく遊べるような言葉です。幼稚園へ入る前には少なくともそういう教育をしておかないと、幼稚園の生活が楽しくない。

離乳語—その二、おとぎ話

もう一つの離乳語があります。この離乳語は、人間の能力、才能というものを決定する、俗にいう頭のいい子どもになるか、頭のよくない子どもになるかの境目であります。頭のいい悪いというのは生まれつきだとわれわれ思っておりますが、そんなことはありませんで、大部分はこの離乳語が適切に教育されるかどうか

によってきまるのであります。

まず母乳語はこういう特色を持っています。目に見えるもの、さわることのできるものしか母乳語は教えることができません。どんな赤ん坊でも「親切」という言葉を覚えられるわけがありません。しかし本当にあるものだけしか使えなかつたら、人間の言葉は非常につまらない。人間の言葉が人間の文化をこしらえ、人間が動物とは違った知性、知恵というものを持つのは、目に見えないもの、さわることのできないもの、この世にないもの、そういうものを言葉で現わし、その言葉を理解する力があるからです。ところが母乳語ではそういう教育ができない。離乳語で抽象的な言葉を教えないといけないのです。本当のことに対してうそを教えないければならない。皆さんは子どもにうそを教えるなんて、とおっしゃるかもしれませんが、うそを教えないければ子どもはよくならない。昔の人はうそを教えるのにうまいことを考えておりました。何かというと「おとぎ話」です。おとぎ話はみんなうそです。

「桃から赤ちゃんが生まれました」そんなことを誰が信じますか。本当にそうだと信じる子はいないと思います。おとぎ話はくりかえし、くりかえして慣用をつくり上げます。そしてやがて、子どもはおとぎ話を本当には起こらないが「おはなし」というも

のがあるらしいということがだんだんわかってくる。これは理屈でなしに、感覚としてわかるのです。このおとぎ話がわかると、人間の言語の入口が開かれたことになります。人間の言葉の特色は、こういう、うそが言えるということですよ。

いずれにしても、おとぎ話をもっともつと真剣に子どもに教えないければいけません。くり返し、くり返して……。しかし絵本はいけません。絵本でおとぎ話を教えますと、うその世界、抽象の世界へ入ることが遅れます。したがって、絵入りの絵本でおとぎ話を教えないこと、大人が本を読んでおとぎ話を教えないこと、口でそらんじている話を何回もくり返すことです。子どもにとつては、一にも二にもくり返しが必要なのです。おとぎ話が離乳語として非常に大事なものは、物語というものの基本形を教えてくれるからであります。大人になってから小説をおもしろく読めるか読めないかということも、このおとぎ話の基本がしっかりしているかないかで決まります。

抽象性と教学

国語の方の基礎を作るのが物語性として見たおとぎ話なら、離乳語としてのおとぎ話のもう一つの特徴は、抽象性を子どもに教えることができることでもあります。現実に存在しないものに理解

をしめし、言葉を書号として使うわけです。これがうまくいきま
すと、ゆくゆく数学がよくできるようになるはずであります。今
まで、おとぎ話は国語科の基本であるということを行っている人
はありますが、おとぎ話が数学的なものの基本となるということ
を言わないのは、おとぎ話というものをよく考えていない、言葉
というものをよく考えていないからであって、おとぎ話をキチン
と教えれば、抽象的な言葉の使い方、したがって数学というもの
も理解しやすくなるはずであります。ただし子どもにおとぎ話を
教えるのが主として女性であるために、そして女性は大体物語性
が好きであるために、どうもおとぎ話と国語を結びつけてしま
うことが多いのであります。しかし、現代において、数学的、論理
的な思考というものが非常に重要であるということは多くの人が
認めている通りであります。頭のいい子どもを育てたいと思っ
ているお母さんは、算数がよくできるようになればいいと思っ
てはまずです。それには、おとぎ話を絵本など見せないで、くり返
しくり返しきかせればいいのです。

小学校一年生に入って算数の文章体の問題が出てきます。「太
郎くんが鉛筆を三本、次郎くんが二本持っています。太郎くんと
次郎くんの鉛筆を合わせると何本になりますか」というような文
章があると、この抽象性が十分ついていない子どもは「太郎くん

という友達はこのクラスにはいないね」と言います。また「鉛
筆って、トンボと三菱とどっち？」「ほくの鉛筆、みんなけずっ
てあるけど、太郎くんのはけずってあるの？」こういうことを言
う子どもは、抽象性が不十分であります。したがってこれは、算
数以前に言葉を理解する能力が欠けています。これでは算数をや
っても能率が上がりません。この場合、太郎くんというのは桃太
郎の太郎と同じである。どこにもいないが、しかし、いることに
することができぬ。

幼稚園では、おとぎ話を、抽象性に結びつけて理解させる方向
に努力をすれば、知的教育の効果があります。現実には幼稚園
は、進学に非常に神経質なお母さん方をたくさんかかえていると
思いますが、そのお母さんたちに「大丈夫です。頭をよくしてあ
げます。算数ができるようになりますよ」と言えば、お母さんは
ポーツとなって何も言わなくなるだろうと思えます。心理学でピ
グマリオン効果ということを言います。はじめはできなくても
「できたねー」と言って試験をくり返すうちにだんだんできるよ
うになるのです。お母さんたちにも「頭がよくなりますよ」とい
っておけば、ある程度は本当に頭がよくなるのです。

三つ子の魂の仕上げ

私は、今の教育の中で「三つ子の魂」というものをかりに考えたとすれば、大学はもちろん無力であります。高等学校も、中学校もだめ、小学校も一年生ぐらいの時によほどいい先生がいれば、ヒョクとして三つ子の魂が少し変わるかもしれません。しかし幼稚園はかなり多くの場合、三つ子の魂というものの最後の仕上げができるのであります。三つ子の魂というと、人格的なことだけ考える方がいらっしゃるかもしれませんが、国語ができるようになり、数学に対する能力をもち、頭のいい人間というものの基本です。それは要するに母親と幼稚園の先生の協力によって、殊に幼児教育者によって行なわれます。もちろん、頭がよくなるだけでは困るのであって、人間の感覚、美しいものと美しくないもの、していいことといけないうこと、というようなことに関して、基本を身につけるのが、三つ子の魂で、それができるのは幼稚園までの時代だと思えます。

私はいまの教育の形をひっくり返して、ピラミッドのように一番最初が一番大事で、徐々に上へ行けばせばまって行くことが当然だと思っております。そういうことから考えますと、教育の基本というものを幼稚園よりも少し下へさげなければいけません。

ん。しかし急にさげてもお母さんたちは教育ができない、先生が教育をするには子どもを歩かせて通わなければならぬ、この二つの理由で、幼稚園以前の教育ができないのですが、もし先生の方が子どもの方へ出向いて行くようになれば、教育は生まれたその瞬間からできるようになるはずです。将来日本人がもっと教育に関心をもつようになれば、どうしても一対一の教育、生まれた時から教育ということになるであります。少数の、三つ子の魂を作り得るお母さんは、ご自身で育てになればよろしい。しかし多くのお母さんは、子どもを甚六にする危険をもちます。その場合は、この人がそばについて下されば立派な三つ子の魂ができる、というような教育者がいれば、非常にすぐれた教育の仕事がそこできるとになります。

昔は代理母親ということをしていました。たとえば大名の子どもがもし甚六になりますと、その藩はつぶれてしまう危険があります。それで家臣の中から賢母のはまれ高い女性を選んで乳母にして、この人に子どもの養育を任せました。いわば最幼時における個人教育をしたわけです。お母さんがある程度しつかりして、子どもの教育をしようという意欲と能力を持っている場合はいいが、そういうことができないようなお母さんが一種のセンチメンタリズムで、わが子は自分で育てるなどというのは、子どもにとって

よくないことであると思います。もっと謙虚になって、場合によつては、あえて人に育ててもらおうというようなこともあつていいと思います。それがいやならば、もっとお母さんは真剣に、子どもを育てることはいかなることであるか、勉強をする、本を読むのではなく一生懸命に考える必要があると思います。しかしこれは理想であつて、現状では幼稚園において三つ子の魂の仕上げをしていただきたいというのであります。

それについて一つ二つ蛇足的なことを次に申し上げます。

耳から聞くということ

このごろ聞くところによりますと、いい幼稚園というのは字をたくさん教える幼稚園だといつているお母さんたちがいて、そのお母さんたちのごきげんをとり結ぶようなことをやつてゐる幼稚園もあるということです。子どもに文字を教えるということは、幼稚園などではやつてはいけなないことの一つであります。幼稚園でやることはそんなことではないはずで、言葉に關して申しますと、「耳から聞く言葉の訓練」ということこそ、幼稚園はやつていただきたい。これがたいへん難しいのです。皆さんが子どもを集めて何か話をされるといたします。三十人の子どもたちに分間話をして、子どもが静かに聞いている幼稚園は、おそらく日

本に一つもないだろうと思います。まあせいぜい一分か一分半ぐらいしか聞いていないだろうと思います。これはいけないのです。少なくとも十分間位人の話を聞く訓練をしていただきたい。おもしろくなくても聞くのです。そんな無茶なおつしやるかもしれません。初めはもちろんおもしろい話でなければだめですが、その内に、先生が話をされたら、どんなに退屈でも黙つて聞いているという訓練ができていなければ、文字などいくら教えてみても、プラスにならないと思います。なぜ私がこういうことを言うかといふと、日本人の最大の欠陥は、耳がバカになつて目で読んだことを理解する能力は、恐らく世界でも最高水準にあると思います。しかし、天、二物を与えず、耳で聞く方はとんとだめであります。外国へ留学された方、外国へ行かれた方は身に覚えがあると思いますが、外国へ行つて一番困るのは、本を読むことではなくて、聞くことです。講義を聞く、日本の大学ですとちょっと難しい字は黒板へ書いたりします。書かないことは本に書いてある、あとで見ればわかる、と思つています。ヨーロッパの大学へ行つて講義を聞かれると、すると、教師はペラペラとしゃべつて大事なことも二度いわない。長い数字も黒板へ書いてくれないのです。アメリカの映画なんかをご覧になると、そ

一つの電話番号は？”といいますと“三八八の九九三三五二だ”なんていいますと“あ、そうか”と言ってかけますね。われわれだと“あ、ちょっと待って”と言ってメモをとります。覚えていられないわけです。要するに耳で覚える能力がないのです。日本人が国際会議に出て行くときとまるで発言ができない。日本の英語教育のせいだという。もっと会話ができるようにならなくちゃだめじゃないか、国際会議で発言できないのは学校の英語教育がいけないんだと言います。しかしこういう考えは間違っています。会話なんか必要じゃないのです。耳がよければ会話はできます。しゃべることができても相手が何を言っているかわからなければ、しゃべれません。国際会議などでも、初めから原稿を書いていって、これをしゃべろうとするから、会議が右へ行っているのに“私は今から左の方へ行きます”というようなことを、言っているわけです。耳でよく聞いて解する能力が日本人にはおしなべて欠けております。これは一朝一夕のことで改まらないでしょう。小さい時から勉強は本を読むこと、字を書くことだとたたくこまれているために、大人になっても大事なことは書いたり、証文にして一札入れることばかり考えております。ところがこのごろのように会議とか電話とか、そういうものが必要になってきますと、いちいち文書の交換などしていないで極めて大事なことが

決まります。

以上は大人の世界のことですが、幼稚園で一番欠けていると思うのは、子どもに大人の話をだまっておくという訓練をきびしくするという点だと思えます。イギリスでは“子どもは見られるべきものである、聞かれるべきものではない”(Children should be seen, and not heard)”と言います。これは“大人の前に出たら子どもは口をきいてはいけません。だまっていなさい”というきびしいしつけであります。大人がしゃべっている間、子どもはじっと聞いています。余計なことを言うと、“シッ”と親はすぐたしなめます。“人の話を聞く”これは民主主義の基本的なことであります。日本では、自分の言いたい放題を申しますが、人の言うことはまるで聞こうとしない。子どもが大人の言うことに對していちいち口をはさむというようなことは、子どもの精神発達の上から言ってもよろしくない。もちろん子どもが自由に思う存分おしゃべりをし、いたずらをする時間も必要ですが、このいう時になって、五分や十分相手の言うことを充分注意して聞けないようなことでは、どんなに本を読んでも、どんなに教育してもだめなのです。耳の、聴覚的な理解、これを幼稚園が徹底してやっていたければ、それが教育の基本になると思えます。

今の小学校の授業は、四十分から四十五分が一時限です。その

間に本を読んだりする時間もありませんが、大体は、先生がしゃべっております。ところが幼稚園を出たばかりの子どもは、注意の集中でできる時間が五分位が限度です。したがって小学校へ入って先生の言われる言葉の大部分は、右の耳から入って左の耳へ抜けてしまいます。これで学校の勉強がよく理解できるはずがありません。注意の集中が、耳で聞いたことをどれだけ理解するかということによって、小学校の下級学年の学力の差はついてしまうといつてよろしい。そして、それは幼稚園の時の教育、訓練によることが大であります。

レトリックの勉強を

私は、これからの幼稚園で言葉による教育をするのなら、先生が面白い話をしなきゃだめだと思います。今みたいな（と、まるで見てきたようなことを言いますが）面白くない話し方では、子どもが注意を集中しようとしてもなかなかしにくい。子どもに興味を持たせるには、なるべく面白い話をしなければいけません。子どもがついひき込まれるような話ができるようになれば、これは言葉の教育者の最大の資格を獲得されたことになります。それにはレトリックというものがあります。訳しますと修辞学となります。同じことを言うのに、一二三四五とやったら全然面白くな

い話が、三五二一四とこういうふうにならると面白いという場合があります。そのところの呼吸がレトリックであります。たとえば俳句の場合に「古池やかわずとび込む水の音」となれば立派な句ですが、「水の音かわずとび込む古池や」と変えては俳句でなくなりません。落語で言いますと、初めに「まくら」があつて、終りに「さげ」がある。このさげを最初に言いますと面白い落語ではなくなくなってしまふ。意味は変わりませんが、ただ順序が違ふ。それによって面白いものと、面白くないものができる。それを教えてくれるのがレトリックであります。日本には二度そのレトリックというのを輸入しようとしたことがあります。二度とも失敗しました。最初は空海が中国から持って来ましたが、『文鏡秘府論』というものであります。これがついに広まりませんでした。二度目は、明治になってヨーロッパから持って来ましたが、美辞学とか、修辞学とかいう名前をつけて広めようとしたが、広まらない。なぜかという、耳から聞く言葉に対する関心が社会に低いかからです。

幼稚園の先生はいろいろお忙しいのに、さらにレトリックの勉強をお願いするのは大変気が引けるのでありますが、三つ子の魂を完成させるのに、最も大切なものの一つが、レトリックに対する関心を高めることであります。しかし十分な参考書もない現状

ではありませんが、いかにしたら面白い話ができるかということ
を、毎日努力されるだけで、すでにレトリックの勉強が始まって
いると言えるのであります。

うそも方便

皆さんはいま、へとへとになって子どもを教育していらっしや
ると思いますが、少し労力を使いすぎていると思います。なぜな
らば、先生方が少し真面目すぎるからです。どういう点かという
と、少し本当のことを言いきぎです。もう少し、方便としてのう
そをつかなければいけません。教育は一種の錯覚に基づくもので
あります。能力のない子どもに向かって「あなた能力がありません
んね」などということ言っでは子どもは育ちません。能力のな
い子にも「そのうちに能力が出てきますよ」とはげましてやりま
す。はげますというのは、一種の希望的観測であります。

戦争中にアメリカにスキナーという学者がおりました、鳩に時
計の針と同じようにグルッと一回りする訓練をしました。これは
すぐできた。どうするかというと、鳩が時計の針の方向に向いた
時にえさをサッとやる。反対側を向いた時にはやらない。すると
鳩は、えさをもらうにはこっちを向いた方がいいということがわ
かって、しばらくすると時計の針と同じようにグルッと回ること

ができたということ。鳩でもそうです。人間でも怒ったり叱
ったりしたのでは、教育はできません。ほめてやらせなければい
けません。人間は言葉でえさをやることができます。何かをした
時「あらいいわね」と言えば、そういうことをするのです。とこ
ろが実際はしばしば、逆のことをしています。ガラスを割る、先
生が怒る。またガラスを割る、また怒る。しかしだんだんあまり
怒らなくなる。と今度はもつとひどいことをする。なぜこうい
うことをするかと言いますと、先生から注目されたいという気持ち
を持っていたずらをしている。小学校の勉強ができない生徒は、
勉強の方で先生に注目されません。しかし、何とかして注目され
たい。そしてやがて悪いことをすると先生がとんできてくれると
いうことを発見する。非常に悲しい形ですが、これで先生を独占
することを子どもが知りますと、いたずらをする。

こんな子どもを直すのに、ただガラスを割らせないように苦心
してもだめです。ほめるにかぎります。ガラスを割ったのではほ
められませんが、方法がないわけではありません。二人だけにな
ってどこかへ行って、おいしいものをご馳走します。叱られるこ
とを忘れて、食べちゃおうということになります。叱られるこ
がってもらいたいという気持ちでやったことなのですから、今こ
でこういうことになればガラスを割る必要はない、ということ

になります。そのあとちょっとよく勉強した時にほめてやる、すると、こういうふうにすればいいんだと子どもは思つて、また勉強するようになります。たまに反対の悪いことをやっても無視することです。

それからお母さんを敵に回さないことです。皆さん若い方が多いようです。ご自分のお子さんを育てたことのない方も多いと思ひます。そういう先生たちには、お母さん方が何となく不信感を持ちます。お母さんの信頼を得るには、何とか無理してでもそのお子さんをはめることです。ほめるには相手よりも一段と高い所に立たなければできないのですから、ほめることで相手のお母さんに差をつけることです。そしてお母さんに協力してもらえば、三つ子の魂を作るのは大変楽になります。

おわりに女の先生へ

もう一つ、幼稚園では大部分が女の先生です。男の子にとつては大変うつとらしいことです。女の子にとつても女の先生は、うつとらしい。女の先生の特技の中にえこひいきがあるということ、です。それに一べんだめだとにらまれると、執念深くいつまでも忘れてもらえないということです。最初ちょっとまずいことがあると、ずーっと尾を引く。男の先生だと無責任というか、カンカ

ンになって怒つても、翌日になるとケロリとして、いい子だなあ”などと言います。子どもにすれば雷は落ちるけれども、カラッとしている。女の先生は梅雨時みたいにぐじぐじしていて、いつまでたつても雨があがりません。子どもは雷の方がいいという。皆さん方は梅雨時のうつとろしさをなるべく早く捨てて、さっぱりと、太陽の如くわけへだてなく、すべての物に光をあてていただきたいと思ひます。そうすればそこから、すばらしい芽が出て、すばらしい花が咲いて、実がなるようになります。ありましよう。そして実がなつた時に、われわれがこんなすばらしい実をつけたのは、そもそも何のおかげであつたかと、成人してからふり返つた時に、あそこに一人の太陽の如き先生がいらしたというようになれば、教育の中で最も大事なものはここにあつたんだ、と社会が期せずしていうようになるだらうと思ひます。そういう教育を皆さんは現にいま、やつていらつしやるのです。

冷たくなつた鉄をたたいておるわれわれのような教師から見ますと、まことに教師冥利につきる仕事をされているのであります。いろいろ苦しいこともおありと思ひますが、どうか次の時代を担う三つ子の魂を作っているのだということをお考えになつて、ご精進をお願いしたいと思います。(お茶の水女子大学)

教科研究における保育の授業の展開(三)

磯 部 景 子

人間のもっとも人間らしい世界

自由で気まままで、おとなのはいる余地のない場所である。しかし、子どもはの中で、子どもどうしのルールをつくり、行動をしている。それは、おとなからみれば遊んでいるとしか見えないが、その中には素朴なルールがある。そして、それに反したものは、仲間から追われてしまう。最も単純なくみではあるが、人間のもっとも人間らしい世界を、自然のうちにつくっている。そんな世界が子どもの世界であると思う。

(不明 K・O)

○ 子どもの住む世界といっても、何か特別な世界ではなく、おとなの世界を、より簡素化した世界ではないかと思う。簡素化ということばの表現は適切ではないかもしれない。人間性の本質からくるなまなましさを感じるのである。

(不明)

言葉でいいあわせない世界

他の人に言葉で言うことができない。青空と風と緑につつまれた世界。おひさまの真下に。土と友だちになれる世界。(不明)

○

子どもたちの世界は言葉にだしていえる世界ではない。

(不明)

おとなにかまってもらいたい

おとなが全く入ってこないのではなく、時にはやさしく、時にはこわくてもいいから、干渉されていると感じない程度にかかわって欲しいと思っている世界。

(不明)

○

みるもの、きくものなど、すべてが興味の対象となる。

おとなが、自分のことについて関心をもってくれることを欲するけれど、あまりかまわれたくない。

親のもとにいれば安心していられる。(不明)

不安

自分の家から離れると恐れ(不安)を感じる。(不明)

自分がいつも通る道以外は悪い所やこわい所へ行く道である気がして、不安になる。(不明)

もろいもの

子どもの世界の中心は、子ども自身であり、そして、子どもはすべてのものが、自分中心にうごいていると思っていると思う。しかし反面、自分をみている人(母親)がいないと、その世界は、もろくもくずれて消えてしまうような不安定なものだと思

う。(数学 N・N)

子どもの世界は、まだ、何も汚されていない。色彩で表現すれば、白にあたるといえると思う。子どもの世界は、環境によって、左右されてしまう非常にもろいもののように思える。

現実の子どもの世界

子どもの世界は、よく絵本の世界とか、夢の世界とかいわれる。確かに、子どもは現実とは違った想像の世界を持っていると思う。しかし、現実的にいえば家庭という世界、近隣の子どもと

うしの世界、あるいは、学校という世界に住んでいる。(幼児教育 K・O)

親の目の届く世界。おとなの保護する世界。できてしまった大きな中の小さな自由な世界。思考の世界だけで自由になれる世界。

子どもが自由な世界に住んでいるというのは、それは思考の世界においてであり、実生活においては数々の制約をうけるのである。(不明 H・O)

現在の子ども

自然に流れて行く水である。人工の川ではない。これが本来の姿であるが、現在においては、おとなの世界が入りこんでしまっている。だから時にちぐはぐな現象が起る。(数学 H・S)

○ 現代の子どもはかわいそうである。家に帰れば塾がまちかまえており、その上に、ピアノ、習字。はたして、今の子どもには、昔ほどの自由があるのだろうか。創造するということに欠けるのではないか。
(不明)

○ 現在の子どもは、本来、子どもがいるべき世界（この世界の定義は私にはできません）とおとなの乱れた世界との間におり、実に中途半端な、不安定な世界（または社会）にいます。と思います。
(史学 T・N)

自分自身の子ども時代をふりかえって

○ 今の子どもが現在どういうことを考え、どんな世界に住んでいるのか私には想像もつかない。これは近辺に子どもがまったくないためだと思う。ここでは、私が子ども時代になんかことを思っていたのかを書くことにする。

○ 子どもの頃は今とちがって、未来にのみ、道が開いているような感じがして、自分が何になるのか、何になったらどうするかということ、映画でも見るように想像していた。そして過去の出来ごとを全く忘れて、明るい面での空想ばかりしていたよう

に思う。自分の生活を物語化していたのだろう。

(数学 Y・T)

○ 私は子どもの頃、自分の見ていない所でも同じように、人が動き、生活しているということが信じられませんでした。遊びに来ていたいとこたちが、車に乗って帰っていくのを見送った時、私には、いとこたちが、そのまま消えていってしまうようにしか思えませんでした。彼らも家に着いて、彼らは、また、そこで生活を始めるのだということが、実感できませんでした。このように、子どもは、自分を中心にした自分と関わりのある世界の中だけで、生きていると思う。
(国語 K・H)

○ ムルヘンのような楽しい世界です。何でも本当となるような世界です。

○ 子どもの頃は、月が出てくると、自分が本当の中に入っているか、さきに思えて、人前でうたをうたったりしたものです。頭にうたんでくるものにふしをつけただけなので、そのうたは、うたになっただけで、いかなかったかもしれません。が、ほんとうに楽しいことでした。
(幼児教育 M・S)

私自身の経験をいえば、おとなの模倣をする、いわゆる、おとなのミニチュア版だったような気もするし、子ども独自のところもない夢の世界にいたような気もする。たしかに想像力は非常に大きなもので、身のまわりのものを何もかも、主人公にして、いろいろな話をつくっては、ひとりで遊んでいた。

○ (生物 K・M)

自分の経験から考えると、子どもの世界は私たちが考えている以上にきびしい世界だと思う。おとなには何でもないようなことでも、子どもにとっては大変なことだったり、いっしょうけんめいになったりした。私たちより真剣に生きているように思う。

○ (不明)

子どもの世界——いつまでも自分が脱出しきれないでいると思っているけれど、いつのまにかいられなくなっている。子どもの頃、土がえるをつかまえて、地面に部屋をつくり、ベッドに寝かせたりした。今となっては考えられない遊びがまだまだ他にもある。何にもなくても、ちゃんと遊ぶことができる。——おとなが気づかない世界。

○ (数学 Y・N)

子どもが住んでいる世界、少なくとも、彼らはそれを感じてはいないだろう。私に通ってきた限り、自ら意識することは少なかった。

しかし、確かにあるような気がする。

彼らは、すべての中で自分が中心である。

すべての事象が彼らの記憶や想像力の中で自分中心に動き回っている。

○ (美術 K・F)

夢なのかもしれない。

子ども独自の、どちらかというところ、楽観的で明るい世界(宇宙)にいます。

すばらしい勢いで広がっていく世界だと思ふ。

私たちが、一度は経験したはずだけれど、ほとんど覚えがな

い。

ただひとつだけ思い出せることは、子ども時代、おとなが自分のことをばかにしていると憤った覚えがある。自分は、いっしょうけんめい考えてやっているのに。

子どもは自分では一人前だともい、そして、おとなと同じ世界にいますとも思っています。

(国語 T・G)

子どもの世界へのあこがれ

夢、不思議、童話、遊び、ファンタジック、おとぎ話、自由。

子どもの世界にある自由な感じと新鮮な感じを私はほしい。いつまでも、子どものようにいられたらどんなにうれしいか。

何にでも、すぐ夢中になれるなんて、とってもすてきなことだと思います。ひとつのことを考えたら、他のことは考えられないなんて、おとなの世界では、とおっていかないけれど、ほかのことがみえないくらいひとつのことに没頭し、真剣になるのは、とてもすばらしいことだと思います。

(不明 M・T)

わからないもの、忘れてしまったもの

私にとって、まったくわからない世界である。確かに、私は以前子どもだったのだから、わからないはずはないのに。知らないうちに成長してしまったという感じである。もし、周囲に子どもがいいたら、もう少しわかると思うのだが。今のところ、子どもという、とりとめがなくて、少し、恐れさえ感じてしまう。

(音楽 S・A)

子どもは、子どもどうしの、ある意味でほんとうにすばらしい

世界に住んでいるように思われます。私たちも、一度はその世界に住んでいたのですが、子どものころのことは断片的にしか思い出せなくなっているようです。子どもの世界のこと、自我にめざめ、自ら成長していく上で、忘れてしまう存在のように思えます。

(国語 Y・S)

(つづく)

(愛知教育大学)



○四月号に「新しく入園する子どもたちへ」を書いていただきました河野ゆり子先生の所属は、川村学園第一幼稚園の誤りでしたので、お詫びして訂正いたします。

○本誌への御意見、御感想は、左記宛にお願い致します。

〒112 東京都文京区大塚一の一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会「幼児の教育」編集部

乳児期の母子関係

— Attachment の形成を中心に — (後編)

岡野雅子

前回に引き続き、今回は attachment 行動と摂食状況、object attachment—養育行動—などの関係について、また、母親が職業を持っている場合や、子どもの側の男女の性差や兄弟順位と attachment 行動の関係についても検討してみよう。

(一) 摂食状況と attachment 行動の関係

栄養法については、母乳のみは一六・二％にすぎず、母乳と人工乳を併用している場合は四二・三％、人工乳のみは四一・五％となっている。

授乳のしかたについては、与える時間を決めている、あるいはだいたい決めている場合が多く、七六・三％で、栄養法と関連させて見てみると、母乳の場合には、時間を決めずに「子どもが空腹の時や空腹以外の泣き声の時にも与える」傾向がみられた。また、飲ませ方では、七割がひざの上に抱いて飲ませると答えているが、母乳の場合にはすべて必然的にそうであるが、人工乳の場合には寝かせたまま飲ませるが四分の一以上いた。

栄養法と各 attachment パターン出現率との関係をみると、平均的出現率では、母乳児の方が人工乳児よりもやや高くなっているが、その差は統計的に有意な差ではない ($P < 0.25$)。また、九パターンの方々もすべて著しい差は見い出せなかった。

授乳の時間と attachment 出現率の関係では「時間を決めないで子どものほしそうな時に与える」(自律授乳)の方が、「時間を決めて与える」(時間制授乳)よりもわずかに高い出現率となっているが統計的差はない ($P < 0.50$)。各パターンでは、「視覚的定位」が時間制授乳の群に多く、「接触」が自律授乳の群に多くなっている。

飲ませ方と attachment 出現率の間には、「寝かせたまま」と「ひざの上に抱く」の群について、ほとんど差は認められない

(P>0.75)。しかし、各パターンについて見ると、「安全基地からの探索」がひざの上に抱いて飲ませる群の方が多く出現している。このことは注目に値すると思われる。というのは、この行動型は、前項(一)で考察したように、他の attachment 行動のバリエータともなると思われるからである。従って、ひざの上に抱いて飲ませる母子関係の方が、寝かせたまま飲ませるような母子関係よりも、attachment がより強くより安定しているのかもしれない。

したがって、以上の結果から、母乳と人工乳の栄養法それぞれ自身が直接 attachment の形成に著しく作用していることはないようであるが、その二次的な産物としての授乳のしかたの違いが、乳児の母親への attachment の形成に影響を及ぼしていると考えられるのではないだろうか。

(四) object attachment と attachment 行動の関係

object attachment (狭義) は全体で二・三%の子どもに見られ、生後一五か月をすぎた頃に、急激に増し、半数に認められる。栄養法との関係では、やや人工乳児の方が母乳児に較べて object attachment がある傾向が見い出された (P<0.25)。

指しゃぶりについては、約半数の子どもが、指しゃぶりをし

ている、あるいは以前にしていた、と答えている。月齢別では生後六か月までが七五%で一歳までの乳児では半数近くに見られるが、一歳をすぎると急速に減少してゆく。栄養法と指しゃぶりの関係は、あまり差は見い出せない (P>0.50)。

object attachment (狭義) と指しゃぶりの関係については相関関係は見い出せない (P>0.975)。

次に、母親への attachment 行動との関係を見てみると、object attachment ありの群の方が母親への attachment をより多く現わす傾向がやや見られるがほとんど差はない (P>0.50)。各パターンでは「接触」「差別的微笑発声」以外の七パターンは、object attachment ありの群に多く、中でも「追従」「差別的に泣く」「安全基地からの探索」は著しい。

指しゃぶりと attachment 行動の関係では、指しゃぶりしない群の方が attachment を多く現わす傾向がある (P<0.25)。各パターンでは、七パターンまでが指しゃぶりをしない群の方に多く現われていて、「追従」と「安全基地からの探索」は両群間の差が著しい。

しかし、ここで思いあたるのは、object attachment ありの群となしの群、指しゃぶりのありの群となしの群では、対象児の月齢が片寄っていることである。それを考慮に入れて見ると、

attachment の出現率が object attachment ありの群、指ししゃぶりのなしの群に多いこと、特に発達の要因の大きい、「追従」「安全基地からの探索」が多いことは、ある程度当然のことと思われる。しかし、さらに見てみると、ここで注目すべき特色は、object attachment ありの群が月齢が高いことにもかかわらず低い出現率を示しているパターンが「接触」と「差別的微笑発声」である点である。しかし、前項(一)で見たように、「差別的微笑発声」は月齢との関係が比較的少ないパターンであるのもかくとして、「接触」は注目すべきであると思われる。つまり、object attachment がタオルやふとんなどの肌ざわりのよいものに固執的な愛着を示す行動であることを考え合わせると、object attachment は、母親のひざによし登ったり体になわたり顔や衣服で遊ぶことの少ない子どもの場合に多く現われる傾向がある、ということを示しているようである。

四 養育行動と attachment 行動の関係

子どもの世話をする人は八一・五%が「ほとんど母親だけ」と答えている。

attachment の対象になっている人については、世話をする人よりもずっと多くの人が挙げられた。特に注意をひくことは、母親

以上に子どもの世話をするのではない父親や兄弟が母親よりもより強く attachment されている場合があるようである。その場合に、母親に「あなたから見て、どうして養育者であるあなた以外の人に一番なつくと思いますか」を問うたところ、「私(母親)は叱るが父親は叱らないから」あるいは「父親は遊ぶ時に大きな動きをしてくれるから」と答えている。月齢別では、attachment の対象となっている人が母親だけという場合は一歳前に多く、一方、母親以外の人に一番強く attachment を示す場合は一歳以後多くなっている(P < 0.10)。この解釈として次のように考えることができよう。Schafer (一九六三)は、ある特定の人(多くの場合は母親)に attachment を形成するとしばらくして第二の attachment の対象者が形成される場合が多い、と報告している。したがって、本結果は、一歳をすぎる頃から attachment の対象が母親だけ、という段階をぬけ出し、attachment の対象となる人が広がってゆく、ということの表われではないかと思われる。そしてさらに進んで、父親あるいは兄や姉に母親以上の attachment を示すようになったのではないだろうか。

一緒に遊ぶ人、については、さらに一層多くの人が挙げられた。母親のみの回答は三三・九%で、母親以外の人が一番よく遊び相手をする場合が二五・三%である。月齢別に見ると、母親だ

けという場合は月齢の低い時期に多く、次第に母親とも遊ぶが他の人とも遊ぶようになり、さらに月齢が進むと母親以外の人と一番よく遊ぶようになる、という傾向が見い出される。

attachment の対象となっている人と一緒に遊ぶ人との関連を見ると、あまり強力な関係は見い出せない (P₁∧O₁E₁) が、しかし、母親以外の人 attachment の対象となっている場合 (二四人) をよくみると、多かれ少なかれ、その人 (父親、兄弟、祖母) が遊び相手となっている。

遊びの内容については、大きく分けて「身体接触」「声や顔の表情」「おもちゃ」と整理してみると、「身体接触」は月齢の低い子に多く、月齢が進むにつれて「おもちゃ」を使って遊ぶが増加してゆく。また、「主にそはで見ているだけ」という回答は六・一か月から一八・〇か月の間にあり、それ以前以後にはない。

子どもに満足を与える状況については、回答はこまかく分かれ、広い個人差が認められる。その中で共通してみられる状況をまとめてみると、生後六か月までは満腹と寝起きが多く、まず生理的要求が満たされることが重要なようである。六か月から九か月では、満腹、抱っこ、体を動かしてやること、など。九か月から一二か月では、外へ出た時、父親と一緒に体を動かして遊ぶ時。この月齢では外へ出るといってもただ外へ行ってみるという

だけでほとんど自分からは何もしないようである。一二か月から一五か月では、外に出た時、父親と一緒にの時、兄や姉と一緒にいる時。一五か月から一八か月では、棚の中の物を出すこと、本の中に自分の知っている言葉が出てきた時などもあり、次第に自分からいろいろなことをやりはじめ探索活動の増大が見られる。一八か月から二一か月では、姉と一緒にの時、人が来た時など、他の人と一緒にいる時の関係を保つことができるようになる。二二か月から二四か月では例は少ないが、絵本を見る時など。

子どもが泣いた時の母親の対処のしかたについては、月齢の低い子どもの場合には泣くと母親はすぐに抱き上げる傾向があり、月齢が進むにつれてそのまま放っておくようになるようである。

次に、attachment の対象となっている人と母親への attachment 行動の関係について見てみよう。attachment パターン出現率は、母親以外の人が一番強く attachment している群の方が、母親のみに attachment している群よりも、母親への attachment 出現率が若干高い傾向がある。これは、母親以外の人に attachment している群の方が、月齢が比較的高いためもあるが、しかしそればかりではなく、母親以外の人に一番強く attachment を示している子どもは、すでに母親への attachment が形成されていて、その余裕と安定によって母親を基地として他の人にまで attach-

ment を形成させることができたのではないかと考えられるだろう。

一緒に遊ぶ人と母親への attachment の関係については、母親以外の人と一番多く一緒に遊ぶ群の方が attachment 出現率は若干高い傾向があるがこれも同様に解釈できるのではないだろうか。

子どもが泣いた時の母親の対処のしかたと母親への attachment 行動については、平均出現率はごくわずかにすぐ抱き上げる群が、そのまま放っておく群よりも高い。しかし、すぐ抱き上げる群は、月齢の低い子どもに多いことを考えに入れると、これは同月齢間では、すぐに抱く群の方が、attachment 出現率が高いであろうと思われる。この質問は、母親の子どもを育てる方針を聞く意味で設けたものであるが、やはりその一端がうかがえたようである。つまり、子どもが泣くとすぐに子どものもとに飛んで行き、抱き上げあやしたり体を揺ったりする母親は、子どもにとっては自分の要求に対していつもタイムリよく応答してくれる人となるのであろう。なお、Schaffer (一九六三) は、attachment 行動を形成した例として、一度も子どもに授乳したことのない少女が attachment の対象者となったことを挙げ、その解釈として、その少女が赤ん坊が泣いた時にタイムリよく反応したことであ

り、それが大変重要なのではないかと考察している。

(四) 母親の職業の有無と attachment 行動の関係

母親が職業をもっていない場合にはほとんどが母親一人が子どもの世話をしているのに対し、母親が職業をもっている場合にはその他の家族や保母などの世話をうけることになる。したがって、時間的には両群の間に明らかな差が出てくるが、しかし、職業なしの母親が「ほとんど一日中つききり」でいるといっても、Cannon (一九六七) が日米の比較研究で指摘したように、日本の母親は、何もしないが子どものそばにいる時間が多い、という習慣によるものかもしれない。なお、両群の対象児の月齢にはほとんど片寄りはない。

母親の職業の有無と object attachment の関係については、職業なしの子どもの方が若干多く見られるが、ほとんど差はない (P < 0.05)。指しゃぶりについても同様で、職業なしの子どもの方が若干多いが、これもほとんど差はない (P < 0.05)。

母親への attachment 行動については、平均出現率で、職業なしの方がやや高い傾向があるが、著しい差はない (P < 0.05)。各パターンでは、職業ありの方に著しく多く出現するものに「見えなくなると泣く」「あいさつ」があり、著しく出現の少ないもの

は「差別的に泣く」「追従」である。

「見えなくなると泣く」と「追従」の関係であるが、「見えなくなると泣く」は平均七・五か月に現われるのに対して「追従」は平均八・六か月に現われる。したがって、職業ありの場合には、「見えなくなると泣く」は母親がいなくなることを経験して、そのような時に泣くのであるが、しかし、その後自分で這うことができるようになったとしても、また母親が出かけることを充分に承知してもはや追従は多くは出現しないのではないかと考えられるであろう。

さらに、attachment 行動の出現時期について見てみると、平均出現時期は、全体平均が七・三七か月に對し、職業ありの群では七・五五か月と遅れている。各パターンでは、職業ありの群が「接触」と「しがみつき」がやや早く「視覚的定位置」がごくわずかに早いほかは、いずれも全体平均より遅くなっている。

また、子どものパーソナリティにも共通した点がいくつかあり「たくましい」「誰にでも愛想がいい」「母親にベタベタつかない」などを挙げる母親が多い。しかし、一歳前後のこの特性がその後成長とともにそのままの形で進むものであるかどうかについては明らかでない。

(六) 性差と attachment 行動の関係

まず、性別と attachment の対象者の関係を見ると、母親以外の人に一番強く attachment を示している場合は二四人あつたが、男子一五人、女子九人で、男子の方が母親以外の人に一番 attachment を示す場合がやや多いようである ($P < 0.25$)。また、父親に一番 attachment を示している場合に限っては、男子二人に對し女子五人で、これは差が認められる ($P < 0.05$)。

object attachment については、女子にやや多いがあまり差は認められない ($P > 0.50$)。一方、指しゃぶりについては、男子にやや多いが、差は認められない ($P > 0.50$)。

母親への attachment 行動に関しては、平均出現率は、男女間の差は見い出されない ($P > 0.05$)。また、各パターンについても差の認められるパターンは一つもなかった。

(七) 兄弟順位と attachment 行動の関係

対象児の兄弟順位は、第一子八〇名、第二子四五名、第三子五名で、第三子は少数なので除き第一子と第二子と比較してみよう。月齡についての片寄りほとんどない。

一緒に遊ぶ人については、約半数が、第一子では「母親のみ」に、第二子では「兄弟」に集まっているが(他の半数は「母親と

他の人」、一方、attachment 形成の対象となる人に関しては、第一子と第二子の間にはほとんど差は見られず、両群とも母親のみが多く、第二子の場合に兄弟に一番強く attachment を示している子どもは三名である。この結果から、第二子の場合には、遊び相手が母親のみというのは少ないにもかかわらず、attachment の対象はやはり母親が一番多いわけで、一歳前後の乳児では母親への attachment が第一子第二子を問わず一番強いということが出来るようである。しかし、第二子の場合には、やがて母親への attachment が充分に形成されると次第により遊び相手である兄や姉へ attachment が広がってゆくのではないかと予想することが出来るだろう。

object attachment については、第一子の方が第二子にくらべて多く ($P < 0.10$) また、指ししゃぶりについても第一子の方が多い ($P < 0.05$)。

母親への attachment 行動については、平均出現率では第一子の方がやや多いが、各パターンでは「見えなくなると泣く」が著しい差を示している。

また、第二子の場合に、母親は「兄(または姉)の時はママにくっついてばかりいたが、下のこの子はこわいものなし。私がいなくても平気で気にしない。上の子と下の子ではどうしても育一

方が違ってしまうようである」といったような感想を述べることが多い。それを裏づけるように、「見えなくなると泣く」が第一子に多いと思われるが、第二子の場合には、母親がいなくなっても、兄や姉がそばにいる場合が多いためでもあるのだろう。

このように、第一子と第二子の間には、一般に、母親と子どもとの相互作用の差があるようであり、それは接触する時間量の差があるとしても、それ以上に、質的な差が考えられ、母子関係の構造的な差異として考えられるのではないだろうか。

(V) まとめ

以上の結果から、子どもの生育環境に大きな差のない限り、一般家庭児においては、attachment の形成に最もかわるものは「発達」であるように思われる。少なくとも本調査の対象児のように一歳前後の乳児の場合には attachment 行動が形成しつつあるところ、あるいは形成し終わったところにあるため、発達以外の要因のはたらしきを受けるまでには到らない段階であろうと思われるのである。あるいはまた、発達以外の要因がはたかっているとしても、いまだそれが外に行動となって現われるまでには到っていない階段なのではないだろうか。

また、その発達には、非常に大きな個人差があることを指摘し

なければならない。四か月齢で四パターン現われている乳児もいれば、一二か月齢でも同じく四パターンしか現わしていない乳児もある。各パターン出現率について見ても四四%から九二%までの幅が認められる。したがって、attachment パターンが多く現われていることのメカ attachment 行動に対する評価の規準とはならないと言えるようである。どの月齢にあって、どの attachment パターンが現われているかが大切なことであり、すなわち attachment の質的内容が問題となるのではないだろうか。

〈付記〉本研究をまとめるにあたり、お茶の水女子大学教授淺見千鶴子先生にご指導いただきました。記して感謝いたします。(群馬県立保育大学)

参考文献

- Ainsworth, M. 1963 The development of infant-mother interaction among the Ganda. Foss, B. M. (Eds) *Determinants of infant behavior* II 67~112
- 淺見千鶴子 一九六九 社会的反応の成立
児童心理学講座第七巻 社会的発達 金子書房
- Bayley, N. & Schaefer, E. S. 1960 Maternal behavior and personal development: data from the Berkeley growth study. *Psychiatric Research Reports* 13 155~173
- Bing, E. 1963 Effect of child-rearing practices on development of differential cognitive abilities. *Child Development* 34 631~648.
- Bowlby, J. 1969 Attachment and loss. vol. 1. The Hogarth press.
- Bowlby, J. 1958 The nature of the child's tie to his mother. *International Journal of Psycho-Analysis*, vol. 39.
- Caldwell, B. M. 1968 The usefulness of the critical period hypothesis in the study of filial behavior. Endler, N. S., Boutler, L. R., Osser, H. (Eds) *Contemporary issues in developmental psychology*. Holt, Rinehart and Winston Inc.
- Caudill, W. & Weinstein, H. 1969 Maternal care and infant behavior in Japan and America. *Psychiatry*, Feb.
- Frederberg, N. E., & Payne, D. T. 1967 Parental influence on cognitive development in early childhood: a review. *Child Development* 1967, 38.
- Hoffman, M. L. 1963 Child rearing practices and moral deve-

- lopment: generalization from empirical research. *Child Development* 1963, 34.
- Kagen, J. & Moss, H. A. 1962 Birth to maturity. A study in psychological development.
- 小嶋謙四郎 一九六八 乳児期の母子関係——臨床心理学的接近——
——医学書院
- Medinnus, G. R. 1961 The relation between several parent measures and child's early adjustment to school. *Journal of Educational Psychology*, 1961, 52.
- 日・日・日研究会 一九六七 日・日・日研究会誌第八卷
- Peterson, D. R., Becker, W. C., Hellmer, L. A., Shoemaker, D. J., & Quay, H. C. 1959 Parental attitudes and child adjustment. *Child Development* 1959, 30.
- Rapaport, D. 1958 Behavior research in collective settlement in Israel: the study of Kibbutz education and its bearing on the theory of development. *The American Journal of Orthopsychiatry* 1958, 28.
- Rheingold, H. L. (Eds) 1963 Maternal behavior in mammals.
- Rosen, B. C. 1964 Social class and child's perception of the parent. *Child Development* 1964, 34.
- Schaffer, H. R. 1963 Some issues for research in study of attachment behavior. Foss, B. M. (Eds) *Determinants of infant behavior* II. 1963.
- Spitz, R. A. Die Entstehung der ersten Objektbeziehungen (邦訳：母子関係の成りたち 生後一年間における乳児の直接観察 古賀行義訳 昭和四〇年 同文書院)
- Sluckin, W. 1964 *Imprinting*. 110~116.



MIT・ナースリー・スクール

原 口 純 子

夫の留学に伴い渡米し、三歳の娘が約一年間通ったナースリー・スクールの経験は、幼児教育を考える上で、私自身にとっても大へん貴重なものであった。

MIT（マサチューセッツ工科大学）ナースリー・スクールのウエストゲイト分室は、大学の既婚学生用アパートのビルの一階にある。日本の幼稚園のように同じ年齢の幼児のクラスがいくつもあるというわけではなく、クラスの数は一つしかない。しかも、パート保育になっていて、週三日、月水金のコースと、週二日、火木のコースとに分かれている。時間は朝九時から十二時までの三時間、子どもの数はいずれも十二名が定員である。年齢は二歳半から五歳未満の子どもが対象となっている。週三回のコースは、年齢の上の方の子どもが多く、週二日のコースは年齢の下の方の子どもが多い。先生は一名、助手が一名、前期の九月から十二月までは、ボ

ストン市内にある教育大学の実習生が助手に当たっていた。それに子どもの親が一名、順番にお手伝いの当番がまわってくる。MITは留學生が多いせいもあって、娘の行っていた週二日のクラスでも、アメリカ人以外に、イラン人、イスラエル人、スエーデン人、ブラジル人、韓国人、日本人など、肌の色も、言葉も、風俗、習慣も違う子どもたちが集まっていた。たった一人の難聴の子どもさえなかなか受け入れてもらえない日本の幼稚園の現状と比べると、ここでは、どの国のどんな言葉を使う子どもも全て受け入れているわけで、この保育のスケールの大きさは大へん興味深く感じられた。

入園には、健康診断書と保育料と保証金十五ドルを払込めばよい。保育料は週二日の場合、九月から翌年の六月までで二〇四ドル、約六〇、〇〇〇円であるが、よく計算してみると、一日九〇〇円、一時間当り三〇〇円の割合になっている。

る、この二〇四ドルの中にはいわゆる保育料、教材費、ジュースタイムのおやつ代等の全てが含まれていて、学期の途中で、園からお金を請求されるという事はなかった。服装は、よごれてもかまわない服を着せて来るようにと言われただけで、日本でままあるように制服、制帽、そろいのスモックなどはない。もちろん月決めの子どもの絵本を園が介在して子どもに売るなどということもない。日本では幼稚園の制服を決めて買わせ、園児にさせている園を近ごろ特に大へん多く見かけるが、幼稚園の子どもにどうして制服やそろいのスモックが必要なのだろうか。とかく我々日本人が常に他人の目を気にし、他人と同じでないと安心してられないのは、他の原因もあるにせよ、こんな幼児期から、似合っても似合わなくても、そろいのものをあてがいぶちのおしきせにさせられるせいもあるのではないかと考えたくなるのは、私の目がゆがんでいるせいだろうか。

ともあれ、簡素で、必要にして十分な幼児教育を見ていると、一見して派手な日本の幼稚園とその教育があまりにも、保育の本質を離れて、幼稚園の経営主義と、幼児教育にむらがる幼稚園産業の、かにもにされている面がありはしないかと思われた。

物質的に豊かだと思われているアメリカでも、M I Tのナースリー・スクールは大へん質素なものだった。部屋は二つあるが、居室の方は机とイス、画架、小動物のゲニベーク（モルモットのような動物）の飼育箱、絵本、ままごと、大工道具等のコーナー、それにたくさん鉢植の植物でいっぱいだし、もう一つの部屋はピアノ、大型積木、ジャンプをして遊ぶ中古のベッドのマットレス、などが置いてあって決して広いとはいえない。ペーパータオルだけは使い捨てであるが、他のものはたいして使えるだけ使っている。画架にかかっている紙は電子計算機の使用済の裏紙だし、えのぐのつぼは離乳食の空ビンを利用したものである。子どもたちに人気のある本物のタイプライターは、こわれたものを父兄が寄付したものだ。大人のドレスや、ハンドバック、それに空箱などの廃品がたくさん用いられている。しかしえのぐつぼの中には十分に濃いえのぐがたっぷりといてあるし、遊びの中で子どもが使うのりとか紙、小麦粉は、使いたいだけ制限されることなく使うことができる。

父母はお金さえ払えばあとは何でも園にまかせっぱなし、というわけにはいかない。十二回に一回はお手伝いの日がまわってきて、保育の準備から、後片付けまで一日、保育に参

加する。参加することは、参観とはだいぶ違って、自分の子どもばかり見ているわけにはいかない。保育全体をながめながら、自分の役割を的確につかんでいかなければならない。初めのころはえらく神経を使ってくたびれたが、父母の手伝いは単に人手としての意味だけでなく、保育を理解してもらうためにも両親教育として有効な方法だと思った。

ナースリー・スクールが、先生の側と、父母との協力によって運営されるという考え方は、かなり徹底していて、そのため会計の収支決算が学期ごとに提示され、先生の月給も、助手の手当も、一目でわかる。その他、大掃除や、こわれた本やおもちゃの修理、ナースリーの新聞、連絡の手紙のタイプなども父母が手伝っている。月一回の父母の会は夜七時半から開かれ、ワインやコーヒー、クッキーなどが出るが、これを用意するのも当番の父母の仕事である。この父母の会は、バザーの計画などをすることもあるが、ある時は児童心理学者の講演とディスカッションだったり、子どもの問題や、しつけの事などについて、先生と話し合う会だったりする。集まる人数が少ないせいもあるが、車座にすわって、どの母親もほとんど自分の考えや感じたことを述べ、活発に議論がとりかわされていた。ディスカッションを重視するアメ

リカの教育の一つの成果を見る思いがした。

さて、保育について述べよう。典型的なある一日は次のように展開していた。

九月〇日 晴

子どもが登園すると先生が、「おはよう〇〇ちゃん」と迎えてくれる。トイレの前の廊下に子どもにちょうどよい高さの深さ十センチぐらいの大きな水槽があって、その中に薄い石けん水が入っている。二、三人の子どもが助手の先生からストローをもらってブクブクをしたり、シャボン玉を作ったりしている。助手の先生が、ストローで水面にモリモリに泡を立てて、子どもたちがキャーキャー大さわぎをしている。部屋の中では机の上にピンクや青の色のついた、肌ざわりのよいブレイドー(小麦粉粘土)が四つぐらいのかたまりになって置いてあり、子どもたちが、クッキーの型ぬきやローラー、フォーク、ままごとのお皿などを使いながら遊んでいる。別のテーブルには、カラー画用紙とのり、それに毛糸やボタン、マカロニや貝がらの入った箱があり、紙に毛糸やボタンをくっつけてデザイン遊びのようなことをしている。大型積木のある部屋から、子どもがボンボン、ピアノをたたいた

ている音が聞こえる。絵本コーナーのマットの上で、今日のお手伝いの母親が両側に子どもを従えて、絵本を読んでやっている。先生は登園してくる子を迎えながら、粘土やのり遊びをしている子どもたちを見ている。しばらくして、ブラブラしている子をさそって、ゲニベークにキャベツの葉をちぎって与えていた。朝から続いた遊びが一段落して、十時半ごろになると全体的に遊びがだれてくる。ここで全員おかたづけになり、机の上をきれいにし、部屋も一応かたづけ。手を洗ってジュースタイムになる。全員行儀よく机につき、紙コップを渡され、リンゴジュースをもらい、ザルに盛ってある甘味のない塩クラッカーを欲しいだけもらえる。時にはピーナツバターやマシュマロが出て、クラッカーに塗って食べる。ジュースタイムの後は休息で床に毛布のような布をしいて、先生も、子どもたちも腰をおろしてすわり、先生が絵本を読んでくださる。物語のこともあるが、絵を見て、この人は何をしていますか、とか、これは何でしょう、などというような話し合いをしていることもあった。お手伝いのお母さんはジュースやクラッカーの後片付けをし、助手の先生は、絵本に興味がなくて積木のある部屋に行った子どもを見に行つた。十一時ごろから十二時まで外に出てグラウンドで砂

場、すべり台、ぶらんこ、それに、庭に三つある小さな子どもの家などで遊んで過ごし、十二時までに母親が迎えに来る。

一口に印象を比喻で述べると、日本で比較的普通に見られる保育を、狭い鶏舎に能率よくつめこまれて、六大栄養素（六領域）のしっかり入った濃厚完全配合飼料を与えられているブローラーの飼育にたとえるとすれば、MITの保育は、庭にはなし飼いにし、コソコソとミミズやハコベをついばむにまかせているニワトリの飼いに似ている。

MITのナースリー・スクールに子どもをやつたことのある何人かの日本人に感想を聞いてみると、一部の人のぞいて概して評判はよくない。お金を払っているのに、子どもは遊んでばかりいるし、これといって何も教えてくれない。日本で通っていた幼稚園はもっと熱心に教えてくれた。その上親もコキ使われる、というのが大かたの理由である。たしかに日本の保育者は大へん熱心な人が多いし、保育内容の教育密度も高い。一日の保育の中に歌も絵も自然観察も体操も、テレビの視聴なども加わって、かつ、それらの全ての活動には全員がもれたり、はみ出すことなく参加することが期待されている。というより強制されているという方が当たって

るかも知れない。たとえ遊びを主とした保育でも、その〇〇ごっこや〇〇遊びは先生によって構成され、全員が〇〇遊びをするように指導される場合が多い。たしかにこのような教育密度の高い保育には、それなりの良さがあり、かつ効果も上がっているのだと思う。保育とはそういうものだという目でM I Tの保育を見ると、子どもたちはなんだかやたらに遊んでばかりいて、お金を払って受けている「教育」とは受けとめがたいと不満をもちやす気持ちは理解できないではない。それでは、このナースリー・スクールの保育は何なのだろうか。保育内容に立入って見ると、ここで主に見られる遊びは、粘土（土、小麦粉、ゴム）、水遊び、砂場、絵を描く（クレヨン、マジックインキ、絵のぐ）、のり遊び、レゴ、組版、フィンガーペインティング、積木、ジグソーパズル、おままごと、スパーマンごっこ、人形遊び、などどの遊びも子どもが自発的にするもので、これらの遊びの指導の特色は、十分な環境の整備と、他人に迷惑をかけること以外はほとんど制限しないことのように見うけられる。たとえば、ままごとをしている子どもが、遊びの中でお料理をして、小麦粉粘土をちぎって水にとかしてドロドロにして、テーブルの上や床が水や粘土でドロドロになろうと、「こぼさないように」な

どと言われることなく、全面的に受け入れてもらえる。このように、子どもが心から満足のいく楽しい情緒的体験に焦点がおかれているように思われた。

歌や音楽リズムはどうなっているかという点、ピアノはあるが、それは子どもが遊ぶためで、先生がピアノを弾いて歌を教えているのは見たことがなかった。しかし子どもの歌のレコードはさりげなく室内に流れているし、レゴや粘土をしながら、先生は声を出して歌っていた。また日本でいうと、「せっせっせ」とか「かごめ」のような歌遊びがたくさんあって、娘もいくつもおぼえてきて家で歌っていた。私の会った先生は、「ピアノの技術は大学で要求されないし、必要もないと思う。もし楽器が必要ならば、ハーモニカでも笛でもギター、アコーディオンなど何でもいいと思う」と言っておられた。

娘がナースリーに通い始めてごく初めのころにまずおぼえてきた英語は、モア（もっと）であった。これはジュースタムにも、ぶらんこを押してもらうにも欠くべからざる必要があったらしい。しかしその後、あれこれしゃべることができるようになる前に身につけてきたのが、「ありがとう」「どういたしまして」という言葉であった。一時期、家中の者が娘

に、何かするごとに「サンキューは」「ユーウェルカムは」と請求されたものだった。ABCが読めるようになることよりも、人間として大切なものを育ててくれているように思った。

私自身、幼児教育における「遊び」の認識を、遊びが子どもに大切なのは、遊びが子どもにとって楽しいから、というより、遊びこそ有効な総合学習手段としての面を強調していたように思う。日本の現状で、楽しいことはよいことだといふことが「教育」として説得力を持ちがたいように思う。たとえば電車ごっこは楽しいからする、というより、電車ごっこは子どもに適切な活動テーマであり、電車ごっこの活動内容を分析してみると、カクカクシカジカの教育的意味がある。したがって多少電車ごっこをしたくない子どもこの活動に参加するようにさそい、かつ遊びは放っておかず、より価値のある段階へ遊びを発展させるために教師は適切な助言、指導をする方がよいという風に考えていたように思う。しかし、日本の「自由保育」よりもっとも自由に遊んでいる保育を見て、日本のかなり外見上遊んでいる保育でも、実質的には主知的な要素が強いこと、そして、それが文部省の出している、六領域を柱とする教育要領によって方向づけられ

ていることを強く感じた。そしてそれを日本の保育の特色とは言えないか。

それではMITの徹底的に遊んでいるナースリーの保育の柱になっているのは何だろう。MITのナースリー・スクール全体の園長をしている、フラン・オールソン女史がある時、「幼児期に是非おさえておかなければならない事柄はそうたくさんはない。本当に幼児期に大切なのは安定した情緒と社会性を育てることだ」と言っておられた。ここにおける遊びの意味は、遊びを通して知識や技術を身につけることより、遊びが子どもにとって楽しいことにウェイトがかかっていて、その真に楽しい情緒的経験こそ、望ましい人格の形成につながっている、とは言えないだろうか。

大人の人手が充分にあって、子どもの数が少ないからこのような保育が可能なのだ、ということではなく、ほんとうに一人一人の子どもが尊重された保育をするために、人数を十二人におさえ、大人の手が三人必要だからそうしているのだと思う。金もうけのためではなく、コミュニティの成員が参加することによって運営されているこのナースリー・スクールは、今も、幼児を伸び伸びと保育している。肌の色も、国籍も、英語の理解の有無も問わずに。

みどり会主催第6回夏季研修会

前号本誌でお知らせいたしました。詳細は下記のとおりです。何かと足場の便利な熱海に会場をきめました。今回も前回までと同様、保育のこころを、原点にいつも立ちかえりながら、現場の実践からの諸問題をお話しあい深めていきたいと思ひます。ご参加をお待ちいたします。

- 期 日 昭和51年8月22日(日)午後から8月24日(火)午前中まで
 場 所 静岡県熱海温泉 ホテル岡本
 費 用 参加費 3,000円 宿泊費 2泊6食 その他を含め 15,000円 計 18,000円
 定 員 270名
 申込方法 下記の形式で申込書を添え、費用全額とともに東京都文京区大塚 2-1-1、お茶の水女子大学附属幼稚園内、みどり会研究部宛お送り下さい。
 6月10日消印から受付け、定員になりましたらお断わりすることがありますので、お早めをお願いいたします。
- 内 容 講 演 幼児教育の今日の問題 森上史朗氏 文部省教官調査官
 分科会 第1分科会 幼児の生活の中のモラルを考える 講師 勝部 真長先生
 第2分科会 幼児のこころを考える 講師 津守 真先生
 第3分科会 幼児文化を考える 講師 本田 和子先生
 第4分科会 幼児と自然のかかわりを考える 講師 太田 次郎先生
 第5分科会 幼児のこころを考察 講師 外山滋比古先生
 第6分科会 幼児のあそびを考える 講師 堀合 文子先生
- 参 加 申 込 書

勤務園名		勤務園住所	Tel.
氏名		夏休中連絡先	Tel.
分科会	第一希望	第二希望	

幼児の教育 第七十五巻第六号

六月号 © 定価二〇〇円

昭和五十一年五月二十五日印刷

昭和五十一年六月 一 日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
 発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
 発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎ 本誌御購読についての御注文は発売所
 フレーベル館にお願いいたします

*万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

〈日本幼稚園協会・みどり会からのお知らせ〉

第3回 幼児教育カナダ・アメリカ視察旅行

(米国建国200周年記念)

CANADA & AMERICA PRE-SCHOOL EDUCATION TOUR
SAN FRANCISCO・LOS ANGELES・VANCOUVER

昨年夏のアメリカ西海岸の視察旅行は、大変好評でしたので、今年はカナディアンロッキーの視察も加えた、幅広いコースを企画いたしました。視察の考え方としては、現職の先生、学生等幼児教育に興味をお持ちの方でしたらどなたでも参加できるように、特にテーマは決めず視察先幼稚園、研究所、の授業参観(サマースクール)、施設視察、ディスカッション等にそれぞれの立場から参加していただきます。

尚、視察にあたっては事前オリエンテーションを行い、5～10人に1人の割合で通訳を準備しますので、内容のある視察ができます。又、アメリカは今年、建国200周年に当り、併せての視察が可能です。雄大なカナディアンロッキーと建国200周年にわくアメリカ西海岸での有意義な視察のひとつに参加をお待ちしております。

旅行概要：(詳細はパンフレットをご請求下さい。)

企画：日本幼稚園協会会長 勝部 眞長 みどり会会長 山村 きよ

コーディネーター：お茶の水大学 藤 永 保 みどり会会長 山村 きよ

コース：東京→サンフランシスコ→ロスアンゼルス→カルガリー(カナディアンロッキー)→バンクーバー→東京(日本航空)

期間：昭和51年7月31日～8月8日(9日間)

募集人員：60名

視察予定先：スタンフォード大学・ピングナーズリースクール
カリフォルニア大学・ロスアンゼルス幼児教育研究所
ブリテインコロンビア大学幼児教育研究所

旅行費用：¥398,000-

(航空機、視察諸費、一流ホテル、観光諸費、全朝食、昼食 夕食各4回)

※旅行費用は3月1日現在 60名を基準に算出してあります。

主催・日本幼稚園協会・みどり会

〒112 東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水大学附属幼稚園内

取扱旅行  日本交通公社海外旅行新宿支店 担当：久保、富田

代理店・〒160 東京都新宿区西新宿1-18-8 (スカイビル内) TEL 346-0170(代)

協力・フレール館 後援・米国商務省観光局

子どもたちの夏休みが、より楽しく充実します！

キンダーブックの なつのおともだち

☆ 年少用

① 年中用



● ①年中用

うさぎやくまなどのたくさんのかわいい動物達の生活をとおり、子どもたちが、楽しみながら、いろいろなことを考え、学びとり、より充実した遊びができるよう配慮してあります。 A 4判 170円

● ②年長用

子どもたちの身近にあるテーマや素材をとりあげ、自立心や探究心が満足できるよう配慮してあります。 A 4判 170円

①年中用、②年長用いずれも

●付録冊子「なつのせいかつ」(生活表)
B 5判・16頁

1週間ごとに約束事項を変えたり、簡単な日記にもなるよう1頁1週間にしています。また旅行の際にも持ち運び易いよう冊子にまとめ、楽しい工作員もついています。

栽培用「あかはなクローバのたね」

なつのおともだち



かわいいゾウの子を主人公に、子どもの夏の一日の生活を、絵本風にまとめました。 A 4判 170円

●付録「なつのせいかつ」(生活表)
B 4判二つ折

② 年長用

